

---

# Fenrir ~ 魔狼と姫君 ~

冷奴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Fenrir 魔狼と姫君

### 【Nコード】

N2579M

### 【作者名】

冷奴

### 【あらすじ】

大陸全土を巻き込んだ戦争『Ragnarok』【ラグナロク】  
から8年、世界は新しい時代へと動いていた。神々の世界に終焉を与えると伝わる通称<sup>フェニリス</sup>Fenrirと呼ばれる銀色の魔眼を持ち、漆黒の髪をした青年セイナ・カインズを中心として、人々の運命は複雑に絡み合い、世界は常に動いていく…

## 序章

戦争があった。

多くの命が散った。  
多くの夢が散った。

きっかけは何だったのか、そんなものを覚えている者は少ないだろう。

ただ、水面に波紋が広がるように、ゆっくりと確実に、狂気は感染した。

大陸は分断され、近代技術を擁護する『帝国派』と精霊文化を擁護する『精霊派』に別れ、互いを己の敵とし、戦争は大陸全土に拡大した。

人々は奪い、犯し、殺し。奪われ、犯され、殺された。  
武器で、あるいは魔術で、全ては人の腕によって、其れは成された。

戦争が日常を支配し、安寧が非日常となった。

大陸全土を巻き込んだ、この戦争を後の歴史は名づけた。

『Ragnarok【ラグナロク】』と。

^^  
^^  
^^  
^^  
^^  
^^  
^^  
^^  
^^  
^^  
^^  
^^  
^^  
^^  
^^  
^^  
^^  
^^  
^^  
^^  
^^  
^^  
^^  
^^

一人の旅人がいた。  
旅人は、強大な戦士であり、魔術師だった。

旅人は、行く先々で多くの人を戦災から守り、やがて『英雄』と  
呼ばれるようになった。

しかし、旅人は喜ばなかった。  
それは、愚かなことだろうか？

否、それは旅人が愚かではないが故に、喜ぶことが出来なかった。  
多くの人を救った。略奪され、虐殺され、蹂躪される者たちの命  
を救った。

しかし、そのために多くの人を殺した。  
略奪し、虐殺し、蹂躪する者の命を握り潰した。

旅人は考えた。

彼らは、命を握り潰された彼らは、確かに悪人であったのかもし  
れない。

しかし、それは一面であって、全てではないのかもしれない。

他者を殺してきたその腕は、故郷で愛する我が子を抱きかかえる  
ための腕であったかもしれない。

彼らにも、守るものがあつたのかもしれない。愛するものがあつ  
たのかもしれない。

ただ、彼らは救われた者たちより力があり、結果として奪う側に  
なつた。

ただ、それだけなのかもしれない。

どちらも、同じ人間なのだ

守った命と奪った命は、どちらのほうも価値あるものなのか。  
価値は、誰が決めるのだ。自分。親族。名も知れぬ第三者。

旅人は苦悩した。そして、わからなくなった。

正義とは、悪とは、善行とは、凶行とは、その境界がわからなくなった。

だから、旅人は救い続けた。

いつか、この苦悩の答えが見つかりと信じて。

それから、どのくらいの時間が経っただろうか。

旅人は、名もない小さな村を救い。村人は旅人のために宴を開いた。

酔いを醒ましてくると、ときとうな理由をつけ村人の輪から離れていた旅人に、一人の少女が近付いていった。

『お兄さん。泣いているの?』

十歳にも届いていないであろう少女は、旅人に話しかけた。旅人は返した。

『人々が救われたのだ。悲しいはずがあるまい。』

旅人は泣いてなどいなかった。現に少女には笑顔を見せている。

『お兄さんの心。悲しい音がするよ。』

旅人は少女をよく見た。少女の両目は光を映していなかった。

『そうか、俺は悲しいのか。確かにそうなのかもしれない…。』

旅人は、自嘲気味に笑った。

『良かったら、少し聞いてくれないか。』

旅人は、少女に話した。胸の内にある思いを自らの苦悩を。少女に理解して欲しいとまで思わない。しかし、聞いて欲しかった。

自分の心を見透かした少女に。

全てを聞いた少女は言った。

『お兄さんは一人じゃないよ。』

旅人は少女を見た。少女は星空を見上げるような格好で続けた。

『それは、お兄さんが一人で背負うものじゃないよ。助かった人みんなが背負っていかねければならないの。だから、お兄さんは一人で悩まないで。』

そして、少女は旅人の方を向いて、その瞳に旅人を映した。

『それでも、もしお兄さんが一人ぼっちなのだと感じたら。』

少女は微笑みながら、旅人に告げた。

『大丈夫。私がお兄さんのそばにいてあげる。』

## 序章（後書き）

ストーリーなど、自分の中でも完結していないため、暗中模索しておりますが、頑張っていけます。



広間の高い位置にある玉座に座り、玉座の両側に二人の従者を従えた自由都市国家イリアの王、セイナ・イリアスは、不機嫌な顔を隠そうともせず、肘掛に肘を置いて頬杖をつくような格好で、右前方に直立していた頭の禿あがった小太りな大臣に、セイナが銀色の瞳を向けた。

「はっ！えっ、謁見に關しましては以上にございます。」

セイナは数人いる大臣に対して、特定せず、いつも数人のうちの誰かに気まぐれに話しかける。

まさか、自分に視線が向けられることを予想していなかったのか、少し焦りながら大臣は伝えた。

「その言い方だと、謁見以外はまだ公務が残ってるってことだよなあ、めんどくせえ。」

セイナは、体勢を変えず、頭だけ沈ませて大きな溜息をつく。少し長めに整えられた漆黒の頭髮がその動きに合わせて大きく揺れ、髪に隠れた右の瞳が見え隠れした。

気だるそうな表情をしているが、目鼻立ちが良いせいか、一つ一つの動作が、実に絵になっている。

「なあ、シオン。仕事サボって、遊びに行かないか？」

セイナは柔らかな表情で、自分のすぐ左側に立つメイド姿の少女、シオン・アマネに問いかけた。

シオンはセイナ専属のメイドであり、護衛の任も兼任している。セイナと同じ漆黒の長髪を纏め、意志の強さを感じさせる漆黒の左

目と、18歳にしては起伏の少ないスレンダーなボディは一級の職人が作ったビスクドールを思わせる精巧な美しさを備え、周囲より『黒曜』と称される少女である。

ただし、右目に付けられた無骨な眼帯と、シオンの平均より比較的低いであろう背丈に匹敵するほどの、巨大なバスタードソード背負った姿は、明らかな異彩を放っていた。

「問題ありません。すぐに行きましょう、セイナ様。」

一瞬でも迷う素振りを見せず、シオンはセイナの提案に従った。

普段から、笑顔を見せることが少ないシオンだが、セイナに関しては話が別であり、主に向けられた表情は、明らかに嬉しそうにしていた。

「いえっ!?!しかし、陛下。。。」

「駄目ですよ、兄さん。久しぶりの顔見せなのですから、今日は我慢してください。」

先刻から無視されていた大臣の発言に被さるようにして、凜とした声が、セイナのすぐ右側から響いた。

「ううん、しかしな、ヨシユア。ここに座っているだけなら別に俺でなくてもできるだろう。身代わりを作る魔法とか誰か使えないのか?」

「兄さんは、この都市国家イリアの王なのですから、代わりなんていませんよ。あと、身代わりを作る魔法は遣い手がありませんのであしからず。」

ヨシユアと呼ばれた青年は、そう言うと、再び玉座より一步後ろに退いた場所に後退した。





セイナは、自身がイリアの王になるとき、国民に二つの命令をした。それは、

『国のために生きるな。国のために死ぬな。』

『共に生きる仲間を大切にせよ。』

これは、王侯貴族に対し、国民が従うことなく自由に生活を営むことの出来る権利であると同時に、王侯貴族の権利のほとんどを無効化する法であった。

無論、抗議に出た貴族も多くいたが、王であるセイナの

「そんなに嫌だったら、自分の財産持って国から出てっついでいいよ。」

という一言で、沈黙化してしまった。

シオンはセイナに、この命令について問い掛けたことがある。セイナの答えは簡潔だった。

「働いている人間が、腹空かしてんのに、働いてない人間が、腹いっぱい食ってるんだ。おかしいだろ？」

当たり前のことだよシオン、とセイナは微笑みを見せ、シオンが二つ目の命令について聞くと、

「アレは、単にそうならいいなって思ったただけだよ。」

と少年のように笑った。

だからセイナは、王になってから6年あまり、国民に対して、強



叫んだ。

「はい!直ちに!!!」

ザナックと呼ばれた青年騎士は、即座に行動を開始した。

「シオン。ヨシユア。」

「はい。」

「シオンは城内のメイドたちに、ヨシユアは国内にいる隠密に召集をかけてくれ。頼んだぞ。」

「お心のままに。」

「かしこまりました。兄さん。」

セイナが立ち上がると、比較的長身のヨシユアより頭一つ分くらい背が高く、背の低いシオンはセイナを見上げるような形となった。セイナに命じられた両名は、フツと姿が消えたのかと錯覚してしまふほどの速さで行動を開始した。

^^  
^^ ^^

広間には、並べられた献上品の箱を先頭に、召集をかけられた人員が整列していた。

右からイリア自衛騎士団、隠密隊、メイドという順に綺麗に整列し、皆が玉座の前に立っているセイナに対し、中腰でひざまずくような体勢をとっていた。

右側に控えるイリア自衛騎士団は、その名の通りイリアの守護を仕事とする団員80名により構成される騎士団であり、国に正式に

認められた騎士であるが、義務的なものではなく有志の性質が強い。故に、国を愛しているものが所属し、結束力も強固である。訓練等も自主的に行われるが、サボるような輩はいない。

セイナから『有事の際は、命の危険を感じたら逃げる』と言われているが、国の人間を守るためには自らの身を投げ出すほどの覚悟をもっている。

中央の隠密隊は隊員30名からなる部隊であり、主に諜報や潜入など裏方の仕事を主としている。その他にも各々得意としていることがあり、仕事の役割もその適性に応じて割り振っている。

後ろ暗い過去がある者や他国から逃げ出した者など経歴は様々であるが、それを承知でセイナに雇われた者がほとんどであり、セイナへの信頼と忠誠心は確かなものである。

また、出身地により様々な魔法適性が混在している。

先頭にはヨシユアがおり、隠密隊の指揮管理に関しては彼に一任されている。

左側に、シオンを先頭にして整列しているのはイリア所属のメイドであり、60名ほどの人員で構成されている。

シオンのような戦闘要員はなく、それ以外の城内における雑務を一手に引き受けており、年齢層は比較的若い者が多い。

元々が孤児であった者が多く、セイナが一手に身元引受人となっている。そのためセイナに対して親愛の情が、それ以上の想いを抱いているものが多い。

国外の任務に出ている者など、一部の者を除き、セイナの許へ集結した。

「皆、楽にしろ！」





先刻、セイナの前に喚ばれたメイド長マリンダが、少し恐縮したようにセイナに話しかけた。

「どうした？マリンダ。」

「献上品のなかに、陛下のためだけに宛てられた物がありましたため。お渡ししてもよろしいでしょうか。」

「ああ、構わん。」

すると、マリンダが控えていたメイド二人に声を掛け、声を掛けられたメイドは奥から中型の箱のような物を運んできた。よく見ればそれは木の蔓で編みこまれた手作りの籠である。

「それでは私はこれで。」

「ありがとう、マリンダ。今日は楽しんでくれ。」

「はい、陛下。……陛下、あの！」

「オホンー！」

去ろうとしたマリンダは何かを言いかけたが、シオンが大きく咳き込み、言葉を遮られてしまった。

「どうした？」

「………、何でもありません。グスン。」

セイナは問い掛けたが、マリンダは何も言わず、壇上より寂しそくに去っていった。

「どうしたんだ、マリンダは？シオン、何か知っているか？」  
「知りません。」

シオンは平常時より、少し冷たかった。

「それより、セイナ様。献上品をご覧になったらいかがですか。」  
「ん、ああ、そうだな。・・・おっ!?!これは!」

言われ、セイナが籠のふたを開けると、途端に明るい表情になり、その反応を見て、横に控えていたシオンとヨシユアが籠の中を覗き込んだ。

中には、数枚の絵と大きな布の様なものが入っており、手紙が添えられていた。

贈り主は、セイナがよく足を運ぶ、国の経営するメイヤー孤児院からであった。

「シオン!ヨシユア!見てみる!これはどうやらマントらしいぞ!」

籠に入っていた布を取り出し、目の前に広げると、セイナは瞳を輝かせながら言った。シオンより十ほど年上であるにもかかわらず、その表情は幼い少年のようである。

マントには色違いの布で作られた、動物や、セイナをモデルとしたマスコットのようなのが縫い付けられている。一緒に入っていた絵も、セイナをモデルにしたものばかりであった。どれも精巧なものではなかったが、手作りで心が籠っており、人の温かさが感じられた。

セイナはそのマントをすぐに身に着けた。

「・・・まだ遅くないな。よし!シオン、ヨシユア、いまからメイヤーに行くぞ!これを着けた姿をあの子たちに見てもらおう!」

セイナは立ち上がると、シオンとヨシユアが行動を開始することを確認せずに歩き出した。

シオンとヨシユアも、それが日常であるかのように、静かにセイナに付き従う。

「陛下！そのような格好で外を出歩かれては、国王としての威厳がっ！？」

広間から外に向かおうとしたとき、セイナの背に声が掛けられた。見れば、今日の公務中にセイナに声を掛けられた小太りの大臣である。

「あん？」

その一言で、セイナの表情から先程までの無邪気さが抜け落ちた。公務中に見せた不機嫌そうな表情より、冷たさを感じさせる表情になる。

それを見た大臣が、言葉を失った。

「それでは大臣。豪華な服を身に纏い、女を囲み、昼から酒をかつ喰らい、放蕩とした生活を送っていれば、誰であっても、その威厳とやらが付いてくるのか？どう思う、ヨシユア。」

後ろに従っていたヨシユアの方に近付き、同時に大臣への距離も詰めて、セイナが問い掛ける。

「私欲で肥え太った豚を王と呼ぶのは、滑稽かと思えます兄さん。」

当然といった態度で、ヨシユアは答えた。

「なるほど。さて、君はどう思うシオン？」

「私はセイナ様以外の生き物を王とは認めません故。ただ、セイナ

様がそのような生活を送らないことは解りきっておりますが、もし、どうしても答えを求めましたら、ノーです。あと、セイナ様に近すぎですので離れてください。（クソ）執事殿。」

続けて、聞かれたシオンも答え、ついでに執事に視線を向けた。

「何か不快な言葉が聞こえましたが、（チビガキ）シオンさん？」

「今すぐ、ただの肉にしてやろうか、ホモ野郎（何も言っておりますせんわ、執事殿）。」

「気持ちと言葉が逆になっていますよ。…まあ、良いでしょう。前から、貴女は兄さんに馴れ馴れしくし過ぎだと思っていたところです。」

「・・・上等だ。刻んでやる。」

「長期休暇をあげますよ。病院のベッドの上で過ごしなさい。」

「おいおい、二人とも論点がズレてるぞ。やめろ。」

シオンがバスターソードに手を掛け、ヨシユアがガントレットのホルダーに触れたとき、二人の肩にセイナは手を置いた。それと同時に、漂っていた緊張感が霧散した。

「すみません、兄さん。」

「申し訳ありませんセイナ様。」

二人が申し訳なさそうな表情でセイナに対して頭を下げた。

セイナも気にするなど、二人の肩を軽く叩き、状況に取り残されていた大臣に再び視線を向けた。

「・・・さて、と言うわけだ。俺が思う威厳は否決された。なら、そんなものはいらん。これぞ、まごうことなき民主主義だな？大臣。」

「

「っは。」

大臣が何も言えずに息をのむと、セイナは大臣の両肩に手を乗せ、顔を覗きこむようなかたちで話しかけた。セイナが大臣より長身であるため、まるで子どもに言い聞かせているようにみえる。

「大臣。俺はお前のように堅苦しい人間も、この国には大切であると感じている。」

「はっ！ 光栄です！」

「だから、」

大臣は、そう言うだけで精一杯であった。セイナは笑うように目を細め、大臣の両肩を持つ手に少し力を込めながら、

「俺を怒らせるなよ。大臣。」

セイナは通称『フェンリル』と呼ばれる、大陸でもセイナしか持ち合わせていない銀色の瞳で大臣を見つめた。大臣は、その瞳から与えられるプレッシャーから、言葉を発することが出来ず、ただ頭を上下に振り、肯定の意を表した。

「わかってくれたならいい。お前も少しは羽目はずせ。」

大臣は解放されると、ヘナヘナと座り込んでしまった。

セイナは踵を返し、再び城外に向けて歩き出し、シオンとヨシユアが再び、それに続いた。

## ある日の日常（後書き）

人物紹介のために、説明文が多くなってしまいました。今度をもっとテンポよく話を進めるよう頑張ります。

## 侵入者

都市イリアの中心に位置するイリアス城、そこから南西方向に少し歩いたところに、メイヤー孤児院は存在する。

戦災や、事故、病気などの理由により、両親の失った子供たちが住んでおり、院長であり、マリンドの三つ上の姉、イリアス城の元メイド長ミランダを中心に20人ほどの様々な出身、年齢の子供たちが仲良く暮らしている。

日が沈み始め、家々の窓から薄い明かりが漏れ出してきた頃、メイヤー孤児院では子供達の笑い声が響いていた。

「どうだ、お前ら。このマント、兄ちゃんに似合ってるか？」

子供たちが遊ぶために作られた、室内の広間の真ん中で、セイナが体を回転させながら子どもたちに、問い掛けた。

囲むように陣取っている小さな子どもたちは口々に

「セイナお兄ちゃんかっこいい！」

「似合ってるよ。お兄ちゃん！」

「イケてるよ！おじさん！」

「せいなおじたん、しゅき。」

「おお、そうかそうか。……いま【おじさん】って言った子は、だ〜れ〜だ〜？」

「「きやーーーーー！！！」」

とセイナが追いかけて始め、それを言っていない子も混ざって、笑いながら逃げ回っている。皆セイナが来てくれたことに心から喜ん

でいた。

その光景を少し離れた部屋から、シオンとミランダが丸いテーブルを囲むようにして椅子に座り眺めていた。シオンのバスタードソードも、今は壁に立てかけてある。

ヨシユアは違う部屋で、比較的年長である子供達の勉強を見ており、席をはずしていた。

「陛下には、いつも足を運んで頂き。いくら感謝しても足りないくらい。」

「いえ、セイナ様はいつもこちらに来られることを楽しみにしておられます。見てください、本当に楽しそうにしてらっしゃいます。」

言って、シオンは目を細めて微笑みながらセイナを見つめていた。シオンはセイナを愛しく感じている。その想いは出会ったときから、ずっと変わっていない。出会い、別れ、出会い、その間にいろいろなことがあった。全てはセイナのため、だってあの人は、

「あの人は私の光です。」

「いま、何か言った？」

「いえ、何でもありません。」

シオンはテーブルの上に並べられたカップを手にとり、静かに口をつけた。

「ところで、シオンさん。うちの妹は元気になっている？」

「マリンダですか。ええ、とても。業務にも忠実で、信頼も厚いです。同じメイドの私としても彼女のようの方がいることには誇りがもてます。」

「そう、ありがとう。きっとマリンダもシオンさんのことを尊敬しているわよ。それにしても、あの子、私がこっちに来てから、あま





「か、金と食料をあるだけ出せっ！そうしないと、この女の顔が傷つくことになるぞ！」

「急いで用意しろ！！！」

入り口には、鎧を身に付け腰に剣を下げた男が三人。鎧のあちこちに傷が付いており、刻まれた紋章から、帝国の兵士であろうことが解かった。おそらく、どこかの妖精派の国の軍と争い、負けた拳銃、逃げ道を失い、イリアに侵入してきたのだろう。経路は、汚れを見れば、外から運び込まれる堆肥か牧草に紛れたか、まあ、そんなことはどうでもいい。

問題は、後方の男に後ろ手を押さえられるようにして、剣を突き付けられている少女である。

「ミランダ・・・さん。ごめん、なさい。」

途切れ途切れに声を発する少女、リーティアであった。

帰ってきたところを押さえ込まれたのか、入り口付近に鞆と、子供たちのために作ってきたのか、お菓子の入った小包が散乱している。

「わかりました。すぐに用意いたします。ですから、その子をつ！」「いいから、さっさと出すもん出せっ！！！」

戦闘にいる男が、ミランダを恫喝する。ミランダが抵抗しないとわかって精神的に優位に立ったようだ。その目も目下の者を蔑むような澀みがある。

ミランダもパニックになり、男達の要求に応えなければという強迫観念と、リーティアを放して欲しいという気持ちが混在し、その場で右往左往している。

様子を確認したセイナはタイミングは見計らい

「すまない。少しいいだろうか。」

「っ！？なんだお前は！」

「大丈夫、抵抗しない。ほら、武器も持っていないだろ。」

両手を挙げ、何も持っていないことをアピールしながら入り口のある部屋に入っていた。セイナは自分の位置と男たちの位置を確認する。

主に言葉を発している一人の男を先頭にして、後ろに男が二人、うちセイナから見て右後ろの男がリーティアを人質にとっている。逃げ道を失った兵隊らしく目には必死と恐怖の念が感じられた。

危ない目だとセイナは直感する。あれでは強制的に事を起こせば、リーティアに傷をつけてしまいかねない。

唯一の救いは、リーティアとミランダの恐怖が少し和らいだことか。

しかし、事態は好転していない。

「あなたたちの要求は、食料と金だったね。」

「そうだ。」

「見たところ、あなたたちは帝国の人間だ。本当の目的としては国に帰りたいのではないか？」

「なっ！」

セイナには男たちの心の大きな揺らぎを感じた。

食料を要求することはわかる。しかし、金は、いまの状況でこの男たちに必要なものなのか。

それが、逃げ延びた敗残兵なら、答えはイエスだ。国外には昔から妖精派にも帝国派にも属さない者達がいて、彼らは戦時中に両国から隠れるようにして生活を営んでいた。通称【ドワーフ】。彼ら

は独自に作り上げた通路とコミュニティを利用して、現在では裏稼業として両国間の橋渡しを行っている。

その際に、必要なのが金だ。しかも、それなりの額を必要とする。しかし、命と比べれば安いものである。

だから、彼らは金を要求した。だが、思ったはずだ、ここでは、この孤児院では足りないのではないかと。

「どうだろうか。一つ、あなたがたに提案がしたい。」

視線を動かし、ミランダと合わせる。視線の動きでミランダに自分の後方へ行くように示すと、すぐにわかったのかセイナの後方に移動してくれた。

「十分な食料と金、それに必要ならば馬車も与えよう。だから、彼女を解放してくれないか。」

「でまかせを言うなっ!」

「信じ難いかもしれないが、私はこの国の王をやらせてもらっているセイナ。イリアスという。王家の名にかけて約束は守ろう。」

途端に、男達に動揺がはしる。まさか一国の王が目の前にいるとは思えない。

なかでも先頭の男は強い疑念の眼差しを向けていたが、背後にいたり、ティアを拘束している男が、セイナの銀色に輝く左瞳を見て言った。

「聞いたことがある。イリア国王はこの世界に一人だけ、銀色の魔眼【フェンリル】を持っている男だと。」

「なら、アイツは本物の。」

男たちが途端に騒ぎ始めた。セイナは続ける。

「どうだ、信用してくれたなら、私の頼みを聞いてくれないだろうか。この通りだ。」

「セイナ、様。」

相手に対して無抵抗であることを証明するために、セイナは手のひらを相手に差し出したまま頭を下げた。

拘束されているリーティアは、セイナのその姿を見て瞳に涙を浮かべた。

「王様……、そうか、あんた王様か。」

男達の表情が、下卑た表情に変わる。この顔は、絶対的優位を手にした人間の顔であるとセイナは感じる。昔、幾度となく見たことのある顔だ。

「イリア王はどうやら、自分の国で暴れて欲しくないと見える。」

「ああ、その通りだ。」

「それなら、要求を飲もう。」

「それは、ありがたい。すぐに用意しよう。」

「ただし、」

男達の目が醜く歪んだ。

「女を用意しろ。贅沢は言わない、人数分つまりは三人でいい。」

セイナは、手のひらを前に出した状態で、彼らの視線を受け入れた。

「女、だと？」

「そう、女だ。この娘は放そう。だから、もう少し年頃の女を寄せ、そこにいる女でもいい。そうしないと街から出る前に一暴れしちまうぞ。」

「そうか。わかった。」

穢れた視線を投げかけられ、ミランダの肩が震えた。

その瞬間、確かに男達の気が緩んだのをセイナは感じ取った。

「交渉決裂だ。眼をつぶれ！ミランダ！！リーティア！！」

ズガアアアアアアアアン！！！！

セイナが言った直後、轟音が院内に響き渡った。

同時にリーティアを拘束していた男の左腕がボトリと地に落ちた。

「ギヤアアアアアア！！！！」

自分の腕がなくなったことを認識し、男が絶叫する。左側の壁から巨大なバスタードソードが生えていた。硬質の石で出来た壁を貫通しているのだ。

「俺の腕っ！俺の腕があ！！」

「落ち着け、落ち着くんだっ！！」

男たちは一気に恐慌状態に陥る。

再び優位に立つために、リーティアを再度拘束しようとするが、いない。

「あ、あの娘、どこだ！どこに行った！？」

「ここですよ。下衆ども。」

リーティアを抱きかかえた男が目の前に突然現れた。ヨシユアである。

「くそお!!」

男の一人が横薙ぎに剣を振るうが、一人を抱きかかえた状態であるにもかかわらず、軽いステップでそれをかわす。

「これだから、野蛮な人間は嫌いですよ。」

ヨシユアが一言発した後、スウッと彼の姿が消えた。精霊魔術である。

先祖からの血や、親からの遺伝により発現する特異な能力、通称【精霊魔術】。属性は様々であるが、ヨシユアのこれは土に属する魔術であり、彼を隠密部隊責任者に任命したる理由でもある。

ヨシユアは相手の視線を外させる力を持っている。その力は彼に接触している者にも及ぶ。

そこに存在するが、認識できないように知覚を操作する能力。滅茶苦茶に武器を振り回せば当たるかもしれないが、訓練された兵士などは【視覚出来ない物は斬れない】という思い込みから彼の能力に翻弄されてしまう。

「畜生つ!!逃げろ!!」

外に走り出す男たち。

そこに、立ち塞がるようにしてメイド姿の少女が姿を現した。気配を感じなかった。音さえも。

その片腕には、巨大なバスタードソードが握られている。

シオンである。

外から壁に突き刺した剣を抜き、一瞬で移動。これは魔術ではなく、純粋な身体能力である。

「逃げられると思っっているのか糞虫ども。」

ブンツ！と片手でバスタードソードが振るわれ、地面が簡単に決られる。シオンの足元に一本のラインが出来た。

「この線を越えたら、お前らの上半身と下半身がお別れだ。二度と再会はできない。」

感情のない表情で、しかし片一方しか露出していない瞳が、彼らを捉えて放さない。

そして、腰を落とし、居合いのような構えで止まった。スカートから上に向けて服が皺をつくる。弓の弦を引くように力を溜めているのだ。

地面を抉る剛力、一瞬で移動する脅威の身体能力、そして凶悪な殺気。

『殺される』。彼らはそれをすぐに感じ取った。

逃げ道には、逃れられない死が牙を剥いている。男達が再び孤児院に顔を向けると、入り口にセイナが立っていた。

「さて、どうする？」

「くそおおおおおおお！！！！！！」

男達は剣を構え、一気に特攻をかけてきた。左腕を失った男も右

手で剣を取り、向かって来る。セイナが何も武器を持っていないため、シオンよりも勝機がみえた結果であろう。

「やはり、そうなるか。」

セイナの瞳が少しだけ淡い光を放った。

そのまま、特に焦りを感じさせない動きで歩き出し、両腕はだらりと垂れ下げた状態。まるで、斬ってくださいといっているような姿である。

「セイナ様！危ない！！」

声を上げたのはリーティアである。あのままでは殺されてしまうという危機からである。

しかし、隣にいるヨシユアは腕を組んだまま、余裕の表情でそれを見ている。その状態を変えず、ヨシユアはリーティアに話しかけた。

「目を閉じろって言われたのに開けちゃって、駄目ですよ。ほら、ミランダさんは開けてない。」

「そんなことより、セイナ様がつ！？」

「兄さんなら心配ないよ。……ああ、そういえばリーティアさんは知りませんでしたか。」

トンッ！

何かが軽く押されるような音と共に信じられない光景が、リーティアの前に広がった。

男が一人、宙に舞った。まるで重力を無視したかのように、セイナに襲い掛かった片腕の男が、真上に飛んだのである。

そのまま自然落下、男は昏倒している。

その直後、ゆっくりと視覚できる速さにもかかわらず、セイナは次の相手の懐に潜り込むと、手のひらで掬い上げるようにして、相手の鳩尾あたりをトンツと押し上げた。

すると、また冗談かと思うくらい簡単に、一人の人間の体が宙を舞い、自然落下。

「うそ……。」

信じられないものを見たような表情で、セイナの動きを見ているリーティア。

しかし、ヨシユアも、離れたところにいるシオンもその光景に対し、何らおかしいと思っではない。

「……兄さんが、王になった六年前。この国の治安はあまりいいものではなくてね。」

ヨシユアが、懐かしむような瞳で話しはじめる。

セイナは、丁度斬りかかれたところをゆったりとした動作でかわしている。

リーティアはヨシユアの言葉を聞きながら、その光景に釘付けになっていた。

「貴族至上主義の国で、上層は汚い金と不正に溢れ、その直属たる騎士たちも名前だけだ。皆、甘い汁を吸いたいがために悪事ばかり働いていて、腐りきっていた。だから、兄さんはそいつらをみんな追放した。」

男は、懐から投げナイフを取り出すと、セイナに向けて投擲するが、その全てを上半身の体捌きだけで避ける。足の位置は全く変わっていない。

「しかし、追放したら、問題が出てきた。新たに、誰が国の治安を守るのか。まあ、当時のことを考えると治安も糞もなかったけど。」

恐怖に顔を歪ませる男の肩に、セイナが手を置いた。そして、少し強めに叩く。

「だから、兄さんは一人で国の治安維持を行った。二年くらいの間一人でね。」

肩を叩かれた男は、重力が何倍にもなったかのような勢いで地面に叩き付けられた。

「僕が代行を辞めて、なるべく兄さんが公務に集中できるようにするため、有志で自衛騎士団が組織され、後に隠密隊も組織された。その数110名程、それでも、まとめて掛かっていって兄さんには勝てない。もちろん僕も彼女もね。」

ヨシユアは彼女と言ったとき、シオンに向けて視線を送った。

セイナが振り向き、リーティアに向かって笑顔で手を振る。

「おーい！怪我とかしてないよなあ！」

「兄さんは、この国で最も強い王なんだよ。」

言い終わり、ヨシユアはリーティアは大丈夫だと小さくセイナに向けて手を振った。



「兄さんも人が悪い。最後の一人はネチネチと痛めつけましたね。」  
「アイツは、一番性格悪そうなヤツだったからな、何が『女』だ。  
ああいうヤツには、このくらいで丁度いい。」  
「そうですね。確かに。」  
「さて、それでは、」

セイナは軽く背伸びをするような動きをすると、

「おっさん！いるんだろ、出て来いよ！！」

大きな声で呼びかけると、闇の中から筋肉質の男が姿を現した。  
隠密隊隊長ウォルフである。セイナは公式の場所であればウォルフを【おっさん】と呼んでいる。昔の縁が原因で、ウォルフに対する話し方も大分フランクであった。

「此度の件は、我らの失態。何なりと処罰を受けます。」

「ああ、気にするな。そもそも仕事を放棄させたのは俺だ。お前たちには何も罪はない。」

「寛大なお心遣い、感謝いたします。」

深く一礼をするとウォルフは一度、昏倒している者たちに視線を向けた。そして何かを思い出すような仕草でセイナを見た。

「良いものを拝見させていただきました陛下。私も久し振りに血が騒ぎましてございます。」

「趣味が悪いぞ、おっさん。まあ手合せなら今度やってやるから。さすがに運動不足を痛感した。」

「隊の若い者が喜びます。」

「全員相手かよ！？それは勘弁してくれ。んで、状況は？」

「付近住民を念のために移動、孤児院の子供たちは私の家に。」

「そうか、助かる。」

「この者たちは？」

「そうだな、とりあえず片腕がないヤツはグレイスのところに持って  
いってくれ、そこに腕落ちてるから。そういえば、おっさん【ドワ  
ーフ】に知り合いがいたよな？」

「いますが、それが？」

「こいつらを使えって、渡してきてくれ。」

「・・・それは良いお考えです。」

ウォルフはその言葉を聞いて理解したのか、軽く笑った。

ドワーフは橋渡し役として金を要求するが、それが無い者に対し  
ては同等価値分の労働を要求する。大変な重労働である。

「そういえば、おっさん。対応が早かったな。」

「騒ぐのは若い者たちの特権にございます。私を含めて、隠密と自  
衛騎士団十数名は早々に退散させていただきました。」

「そうか、悪かったな。気を使わせて。」

「そのようなことは決してありません。これが我々の生きる道に  
ございます。」

「ありがとう。それでは後の処理頼んだぞ。孤児院の子供たちは別  
に家を用意する。剣でぶち開けた穴を修理しないといけないからな。」

「お心のままに。」

そのまま、三人を抱えると、ウォルフは闇に姿を溶け込ませた。

姿を消すのはヨシユアと同系統の精霊魔術らしく、ヨシユアに習  
って覚えたらしい。

本来、得意としている魔術は違うものだ。



修繕に関することなどをヨシユアに一任し、セイナとシオンは城への道を歩いていった。

すると、突然シオンが立ち止まり、動かなくなった。

「セイナ様。」

「何だ？」

セイナはそのままシオンを見る、シオンは少し体を傾けセイナに頭を突き出すようにしている。何故か頭に着用しているヘッドドレスを外していた。

「私、さっきの戦闘とっても恐かったデス。」

感情が全く籠っていない声である。

「……………、私、恐かったデス。」

セイナはシオンがちょっと恐かった。

「何を要求しているんだシオン。」

セイナが聞くと、シオンは少しムツとした表情になったが、体勢を変えるつもりはないらしい。

「……………撫でてください。」

「へっ？」

「恐かったので撫でてください。」

「何故？」

「撫でてくれないと、絶対にここから動きませんよ！」

もはや脅迫である。

が、特にセイナも不快に思うことはなかった。

シオンは自分から何かを要求してやることはあまりない。だからこそ、何かして欲しいという彼女の願いをセイナは嬉しく思うのだ。

セイナは優しい手つきでシオンの頭に手を置いた。

「はふう。」

「ん？」

「大丈夫です。続けて欲しいです。」

「そうか。」

「うふふ。みっしょんこんぷりーと。」

シオンは恍惚の表情を浮かべていた。

セイナはシオンのことを考える。

出会いから十年、別れ、再会したのが五年前。常にセイナに付き従い、共にいてくれる存在。

過去に、一生背負う運命を強要させたにもかかわらず、変わらずに傍にいてくれた少女。

ありがとう。

セイナは心からそう思う。

「……………ところで、いつまで撫でていればいいんだ？」

「私が満足するまでです。はふう。」

「なんら根拠はないが、  
『長い戦いになりそうだ。』  
とセイナは思った。」

## 侵入者（後書き）

一気に書き上げたら、体調崩しました。ちょっと朦朧としていたので誤字脱字があるかもしれません。咳も止まんないし（コホコホ）。気圧の変化に弱いんです。

次の話は今回のようなハイペース（それでもゆっくりなのかな？）とはいきませんが、なるべく早く書き上げるようにします。

よかったら、感想とかあると嬉しいです。

ある程度ストーリーの方向性はありますが、自分の考えているものと長編ならぬ、巨編になってしまいそうで、読み続けてくれるかなとか不安な今日この頃です。

ダメだしも励みになります。

私は自分に対して『魔法が全然でてこないじゃないか！』とツツコミを入れていきます。

すいません。RPGとかあまりやらないので魔法がわからんのです。（人生において無事にクリアしたものはPSのポポ○クロイスとSFCのF○5とドラ○エ6くらいでしょうか。その程度の知識です。つてます。）

よろしく願います。

## 日常を壊す者

侵入者騒動から、2週間。

セイナは気にするなと皆に命じたが、どこか自分達の責任と思いつ込んでしまうところがあるのか、各々が緊張感を漂わせ、それが国全体に蔓延している。

悪いことではないのだが、ゆったりした感覚を好むセイナにとっては、いささか好ましくない雰囲気であった。

「どうにかなんないかねえ、つと。」

「何が、ですか？ふっ！」

「いや、なんか、ふんっ！空気がさ、重くて、よっ！」

「つく！？それは、いたしかた、ない、ことで、す！」

セイナとウォルフは、城に設置された訓練場にて組み手をしていった。侵入者騒動の際に約束をしていたからである。少し離れた日陰でシオンが、訓練場を囲むようにして隠密隊のメンバーが様子を見ている。皆が一様に息をのみ、言葉を発していない。

ウォルフが打ち込み、セイナがそれを避け、避けた体勢からさかさ防御の隙間に打撃を打ち込み、それをウォルフが防御する。というやりとりを、かれこれ一時間は繰り返している。

互いに素手で、尚且つ、プロテクターを着けずに軽装。これはセイナの『やるならば、常に実戦を想定しろ。』という教えからであった。

ただし、それ以上に、一般人には理解しがたい光景があった。

セイナは目隠しをした状態で、ウォルフと組み手を行っていた。

その状態でウォルフと会話をしながら、笑みを絶やさず、少し余裕

を感じさせるほどに攻撃を繰り返している。

対するウォルフは、セイナの動きに確かな隙を探しながら、会話はすれども、目は笑っておらず、必死さを感じさせていた。

これらのもので、どちらが優位に立っているか言うまでもなかった。

「ん？おっさん、息上がって、つと、ねえか？」

「そん、なことっ！ありま、せんよっ！」

「っし！んじゃ、王手っ！！！」

「っ！？ぬお！！！」

セイナが、ウォルフの拳撃を体全体で受け流すようにして、体を回転させながら懐に飛び込むと、そのままの勢いを使い、右半身を接触させ、ウォルフに当て身をくらわせた。

全体重をかけた当て身が直撃したウォルフは、後方に向けて吹っ飛んだが、その後、空中で体を回転させて着地、その体格からは想像できないほどに実に軽やかではあったが、尋常ではないダメージを負ったことをウォルフの両足の震えが物語っていた。

「終わりで、いいだろ？」

「・・・ええ、参りました。」

そう言って、ウォルフは座り込んだ。途端に、周りにいた人間から溜息が漏れる。張り詰めていた糸が切れたかのようにであった。

セイナは目隠しを外し、外から入る陽光に目を細めながら、ウォルフがいる方向に体を向けた。

「にしても、おっさん。別に魔法使っても良かったんだぞ。」

セイナの言う通り、ウォルフはセイナとの組み手に際して、純粋な肉体の格闘戦で戦い、魔法の類は一切使っていない。セイナの知っている限りでいえば、ウォルフの魔法特性は白兵戦において秀でた能力であったはずだ。

「私は、以前も申し上げましたとおり、陛下が目隠しを取っていただければ、使わせていただきます。」

「それは、おっさんなりのハンデか？」

「いえ、恐れ多いこと。自分が陛下の目隠しを取るに足る実力がつきましたらという意味にございます。」

「俺に攻撃を当てていただろう？」

「攻撃を当てるといっものは有効打をカウントします。」

「固いやつだ。それに、一回は目隠し無しの状態をやっただろうに。」

「ですから、ですよ。」

ウォルフは苦笑いを浮かべながらこめかみの辺りを指で搔いた。

隠密隊長ウォルフ「ステイングラは元タイリアの民ではない、それ以前にセイナと初対面の時は味方ですらなかった。

セイナに恨みを持つ人間が雇った刺客、雇われの殺し屋が昔のウォルフの仕事である。

敵としてセイナと対峙したことを今でもウォルフは忘れていない。銀色に輝く瞳、絶対的な実力差、自分より10ほど若い青年に与えられた味わったことのない完全な敗北。

そして、何より自害を選ぼうとした自らの命を必要としてくれた器の大きさ。

ウォルフはあの日からこの国のために生きることを決めたのであ

る。

現在では、ローズフェルトから移住してきた女性と結婚し、一人娘を授かり、一人の良き夫として、父として、隠密隊隊長として生きている。

あれ以来、守るべきものが増えたとウォルフは穏やかに思う。

「わかった。それでは精進しろ、ウォルフ。」

「かしこまりました、陛下。」

「おーい！シオン！！」

セイナはウォルフとの会話を終え、離れて見ていたシオンに呼びかけた

シオンの表情がパツと明るくなり、一度セイナのほうへ向かおうとして立ち止まり、引き返すと背負っていたバスタードソードを壁に立て掛けて、棚の上にあったタオルを持って小走りで見寄ってきた。

「タオルでございますか？セイナ様。」

「ん、ありがとう。でも、ちょっと違うお願いだ。」

「はい、なんなりと。」

「久しぶりに、手合せをお願いしたいのだが。」

その瞬間に、場内にどよめきが走る。

一国の主にして、国内で最強といわれる男、セイナ「イリアス。かたや、男でも扱うことが困難なバスタードソードを片手で扱い、剛力と脅威の身体能力を備えた少女、シオン「アマネ。

国内で互いに敵無といわれる両者による組み手は、武を志す者にとって、あまりに魅力的だ。

しかし、周りの期待を背にした当の本人であるシオンは乗り気ではない。証拠に明らかに申し訳なさそうな表情をセイナに向けていた。

「セイナ様、あの、申し訳ないのですが、私は、」

「なんだ？シオン、さつき『なんなりと』って言ったじゃないか。」

「・・・言った覚えがありません。」

「あつ、シオン、お前！」

「何で、いまさら私と手合せなのですかっ!？」

「さつき、言ったとおりだよ。『久しぶり』って、最後に戦ったのは、5年前だろう?」

「戦ったって・・・、あれは、セイナ様の罠に嵌められたから、しょうがなくてすっ!ノーカウントですっ!!!はじめからセイナ様と戦う気なんかありません!！」

再びどよめき。ただし、理由は異なる。『黒曜』と呼ばれ、常に冷めた表情でいるシオンが、感情を露にする光景に、ある者は合掌し、ある者は『眼福』という言葉を呪文のように繰り返し、ある者はある意味で昇天している。

訓練場に繋がる入り口の一つから、タッタッタツ、と誰かの駆けるような音が聞こえた。

「兄さん!また、公務を抜け出して何をしているのですかっ!？」

「やばい、ヨシユアだ!お前ら、散れ!」

「お、応!!!」

隠密部隊がすばやく退散し、ヨシユアも一瞬、その光景に気をとられた。

その隙を突き、ヨシユアの方を向いていたシオンの手をセイナが



らずといった感じになっていたようだ。

訓練場から、そのまま逃げ出したので、セイナは隠密訓練用の上下黒で統一された身軽な服を着ており、王と言うにはラフな格好である。また、シオンは剣を持っていない以外はメイド服のままなので、組み合わせとして外見上は違和感がある。

公務をサボってセイナが街中にいるのは、イリアでは日常的である。国内ではセイナが日中に街を歩いていても、ほとんどの者がそれに対して違和感を覚えることはない。もちろん服装に関しても、公務の一環であったり、公務から逃げ出てきたりと、その背景において服装もバラバラであるので、今のセイナの格好も特に気にされることではなかった。

自由都市国家と銘打ってはいるが、イリアという国は帝国、果ては他の妖精派の国と比べ、小国であり、治めている土地の面積、国の規模、どれをとっても大きなものではない。

ただし、他の妖精派の国に囲まれるように建国されたイリアは、背に渓谷を背負い、国自体が高地にあるため、自然の要塞と化している。他国からすれば攻め難いという印象を強く与える国なのだ。

セイナが王となって6年。治安は日を追うごとに改善し、街の間も穏やかな日々を過ごせるようになってきた。

差し出されたコップを手に取ると、セイナは片手で掴み一気に飲み干し、シオンは両手がコップを包み込むようにして、少しずつ咀嚼するように飲み始めた。

「おばちゃん。ご馳走様。金置いとくから。」

「ご馳走様でした。」

セイナは軽く片手を上げ歩き出すと、シオンは深々とお辞儀をしてからシオンの後に続いた。

「陛下様！お釣りは！」

「必要ない！俺にはそれだけの価値があった！また来るぜ、おばちゃん！」

「毎度ありがとうねー！」

婦人は朗らかな笑顔で二人を見送った。

しばらく、そのままセイナは街を歩いた。今日も街は活気に溢れている。良い雰囲気だ。

すれ違つたたびに声を掛けてくれる人々、笑顔の子供たち、みんなを守りたい素直にそう思う。

「ん？」

セイナは背後に突然強烈な視線を感じた。

気のせいではないな。証拠に隣を見るとシオンも何か気づいたようで、表情が変わっている。

その視線は、それから全身に絡みつくような感覚をセイナに覚えさせた。

強い敵意か、しかも隠そうとしていない。

バサバサバサ！

セイナとシオンの頭上に一羽の鳥が降下し、口に銜くわえていたものをセイナに渡すと、再び飛び立った。隠密部隊所属の伝達用鳥である。

鳥が銜くわえていたものは、どうやら手紙であり、セイナはそれを広げた。

『西側城壁を警備していた兵士が何者かによって気絶させられました。いま、隠密にも捜査させています。お気を付けて下さい。』

ヨシユア』

「おそらく、それだな。」

セイナは手紙を服の中にしまい、シオンに話しかけた。

「気付いているな？シオン。」

「はい、セイナ様。後方に一人、尾いてきますね。」

「まっ、たぶん俺絡みだろう。敵意は完全に俺に向いている。しかし、ここではマズいな、街の人を巻き込む危険がある。シオン、付いてこい。」

「承知しました。」

セイナが走り出すと、シオンが後に続いて走り始める。

街の人間も、突然走り出したセイナとシオンを注目していたが、いつも通り何かあったのだろう程度にしか考えてはいないだろう。

セイナとしては、ここで避難を命じれば、小さな騒動となり、それが侵入者を刺激しかねないという考えの下である。また、願わくは、ここでは事を起こさず、黙って付いてきて欲しいものだと思っていたが、それに関しては心配がない様で、自分たちにしつかりと

付いてきていることが心配でわかった。

セイナは空を見上げる。太陽は真上に昇っていた。

二人は常人では考えられないようなスピードで疾走しているが、それに付いて来る侵入者も、ただ者ではないことがわかる。

その状態で走りながらセイナはシオンに向けて話しかけた。

「シオン、いまの時間、誰もいない場所はあるか？」

「そうですね、この位置と状況から考えますと、ラウンドヒル辺りでしたら、今は人がいないかと思われませう。」

「わかった、では、そこにします。」

イリアの東端に位置するラウンドヒルは、昔から街としては整備されていない土地で小さな山々の麓に広い平原が広がっている。

普段は、騎士団や隠密の屋外訓練場として利用されているが、ヨシユアの伝令が各部署に伝達されていると仮定して、恐らくいまは無入である。

ここからなら、常人で1時間程度。

それなら、10分かかるまい。

後ろを振り返る。

大振りのマントで体全体を覆い隠した人間が追いかけてきている。見たところ、まだ余裕はありそうか。

「もうすこし速くするぞ、シオン。その服装で付いて来られるか？」

「もちろんです。」

一刻も早く、街から遠ざけたい思いで、セイナはスピードを上げた。



その瞬間、二人の間に強い緊張状態から生じた独特の空気が充満していく。

「それでは俺が勝つたら、話を聞かせてもらおうとしよう。」  
「勝てたらな。」

理由がわからない以上、本人から聞き出すしかない。  
言い終わると同時に、女の姿が消え、セイナは後方に跳んだ。

ドゴオ！という衝撃音と共に、先程までセイナのいた場所の地面が抉られ、半径2メートルほど大きく陥没した。  
予想以上に速い。

「それが得物か。」

女は、大振りの剣を両手で構え直した。  
シオンのバスタードソードより長さは劣るが、刀身に幅があり、重量感を感じさせる。ただ、それだけでは地面を陥没させるほどの威力を出すのは難しい。

何かあるかとセイナは直感する。

「セイナ様！」  
「大丈夫だ。心配ない。もう少し、離れている。」

シオンはセイナに従い、見守ることに徹していたが、心配そうな表情というよりは、代わりに自分が出ようとする気持ちを抑えているように見えた。

「はあああああああー！！」

女は二撃目の動作に入っている。

「だらあ！！」

振り下ろされた斬撃を地面に転がるようにして避ける。目的は一撃目の場所に移動するためである。

陥没した場所の周りにある草が焦げている。

「なるほど、爆発【エクスプロージョン】か。」

大方、インパクト時に剣に魔力を乗せて衝撃面に魔力を爆発させる。それならこの威力も納得がいく。

使用時に、直接魔力をぶつける分、消費が激しいが、これを連発してくるということは、ただの馬鹿か相当の遣い手か、恐らく後者だろう。

ただ、この程度なら【使わなくても】制圧は可能だ。とセイナは感覚する。

現在、何も武器を持っていない状態で彼女を制するには、直接的な打撃を与えるほかない。

しかし、軽率に間合いに入るようなら、爆破の能力により体ごと粉碎されかねない。

それならば、どうする。

簡単なことだ、爆破の能力を発動させた瞬間、間合いに入り打撃を加えればいい。

実際は、簡単なことではない。  
しかし、セイナの瞳がそれを可能とする。

【魔眼フェンリル】。その銀の瞳は、能力を封印している状態でも常時、常人離れた動体視力や魔力の流れを見るところという恩恵を所有者に与えている。

帝国兵の攻撃を簡単に避けた動き、小さな力で相手に強烈な衝撃を与える打撃はその力の効果である。

ただし、力を使用するには、その動きに耐えうる肉体を要し、セイナは血の滲むような鍛錬と幾たびの戦場を経験した末に、その力に耐えうる体を手に入れたのである。

次の一撃で決める、セイナはそう考え、彼女の動きを見る。

横薙ぎから、上段に振りかぶり、そのまま叩きつける。それを彼女の初動から予測する。

「はっ!!」

横薙ぎに振り抜かれた剣を、最小限の動きで避ける。ここで、足に可能な限りの力を溜める。そして、上段から振り下ろされる一撃を軌道が修正できなくなるところまで引き付け、懐に、

「いまだっ!!」

溜めをつくっていた足の力を解放し彼女の懐に、下段から潜り込む。

しかし、セイナにはそのときはっきり見えた。

彼女の瞳が不意を付かれた驚愕ではなく、畏にかかった獲物を見るような瞳であったことを。

^^ ^^

女は魔力を打撃点に集約させ、二撃目も同じように地面を抉った。考えが、正しければ恐らくはこの技の性質は見破られている。それと同時に対応策も。

それは狙い通りでもある。

魔眼フェンリルがどういったものであるか、それは国にあった多くの資料からある程度の推測を立てることが出来る。

そして、風聞が確かであれば、魔眼の所有者であるセイナイイリアスは、侵入者を誰一人、『殺害していない』フェミニストだ。

恐らくは、自分のことも戦闘不能にすること狙ってくるはずだ。そこに勝機をみる。

彼は武器を持っていない、それならば攻撃方法は打撃。

私が爆破の能力を使っていれば、そのうちに隙を突いて懐に入ってくる。

動きを見る。視線、体勢。

三撃目の、横薙ぎを避けた体勢から、彼が次の一撃を合図に打撃を加えにくると確信した。

それが狙っていたタイミング、彼は私をただの爆破能力者と思っ  
ている。

予想通り、驚異的な速さで、懐に入ってくる。  
しかし、あらかじめ予想していたため必要なことをするだけだ。

「【全てを焼き尽くせ、イフリート】。」

^^ ^^

「【全てを焼き尽くせ、イフリート】。」  
「なっ!?!」

その言葉が響いた瞬間。彼女の体が炎に包まれた。  
一気に、彼女の周囲の空気が高温になっていく。

セイナは打撃を加えようとした拳の動作をキャンセルし、地面を  
後方に向かって蹴ったが、無理な動きをしたため体勢が不安定にな  
ってしまっ。

その状態を好機と見たのか、彼女が火に包まれた腕を横薙ぎに振  
るっ。

すると、彼女の腕から産み落とされたかのように、いくつもの火  
球がセイナに襲い掛かった。

ドスツ!! ドスツ!!

「くっ!」

避けきれず、直撃する。

火球の威力は凄まじく、二発しか直撃していないのに体ごと飛ばされた。

そのまま、地面を転がる。

「高位魔法【ハイスペル】だと・・・。」

高位魔法【ハイスペル】は、血の特性による魔術の根源となる要素をありのままに使用できる魔法であり、その威力は一般的な魔術と違い強力である。

ただし、使用できる人間は、その根源を特色として持っている血がより濃く受け継がれている者、つまりは王族である。

それでは、彼女は

「止めだっ!!」

彼女が剣をセイナの頭上に投げた。

セイナはそれを見た。剣に尋常ではない量の魔力が込められている。  
く。

まさか、

「剣を爆破させるのか!？」

シオンの位置を確認する。込められた魔力量を考えれば、あの距離では爆破に巻き込まれる。

しかも、シオンは吹っ飛んだセイナに気をとられ、注意が散漫になっっている上に、自らを守るべき武器もない。

「シオン!!」

自分のことは考えず、ただセイナはシオンにむけて疾走した。

「セイナ様っ!!」

シオンがセイナに呼びかけたと同時に、鼓膜を貫くような爆発音と衝撃が響き渡った。

## 日常を壊す者（後書き）

今回は、ある意味完結となっていない話です。

すこし長くなりそうだったので、一つの話をもつて2部構成にしてみようかと思ったわけです。

バトルシーンって難しいですね。でも、このあとバトルシーンとなるでしょう（涙）

あと、修正したのですが、一話目からミスしている箇所、間違った名詞を使っております（汗）気づいたときにはゾツとしました。

正直、自信をもって日本語が語れる日本人ではないので、何か言葉の使い回しで、これはイカンというものがありません。ご指摘お願いします。

私の稚拙な文章を読んでくださる方、感謝です。

頑張つて、続きを書きますのでよろしく願います！

いまよく見たら誤字だらけでした（涙）まだ修正箇所があるかも・

・

2010.7.3.12:30頃

## 魔狼

『お前に、望みはないのか？』

旅人は、盲目の少女に問い掛けた。

少女は、少し考え、

『一度だけでいいから、外の世界を見たい。』

と、苦笑いを浮かべながら旅人に言った。

それが、叶わぬ願いと知っているからだろう。

少女は決してわがママを言わない子供だった。

目の見えない自分を愛してくれた母。

優しくしてくれる村の人たち。

そんな、幸せに包まれて、これ以上を望んでは罰が当たると思い。

少女は決して、それ以上を望まなかった。

けれど、確かに望みはあった。

一度だけでいい、母の顔が見たい。

一度だけでいい、村の人たちの顔が見たい。

一度だけでいい、目の前にいる青年の姿を見たい。

彼女はわがママを言わない。それは自分にとって過ぎたるものだ

から。

けれど、旅人には聞いて欲しかった。自分の心の内を話してくれた青年に、自分の心の内を聞いて欲しかったのだ。

それで満足だった。ただ、一人だけ、自分を共有してくれる人がいるだけで、少女は満ち足りたのだ。

『そうか。』

旅人は、ただ短くそう答えた。

しかし、そのとき少女の聞いた旅人の心の音は不思議なものだった。

これは、【決意】。

『見たところ、お前の目は少々特殊だ。恐らくはこの右目が強い影響を与えている。』

少女に近付き、旅人はそつと少女の右目に手を添えた。

『成功するかは俺にもわからない。それでもいいか？』

旅人の言ったことが少女には良くわからなかったが、少女は旅人を信じて、首肯した。

『強い子だ。』





シオンはセイナに抱きかかえられるような格好で、地面に横たわっていた。

爆発の瞬間、セイナはシオンに向けて走り、庇うようにしてシオンを包み込むように抱き締めた。そのまま衝撃に二人ごと飛ばされ、このような状況になったのである。

シオンは見上げた後、急いでセイナから体を離して自分の体を起こし、セイナの体を確認する。

服は破け体中に裂傷ができ出血している。特に、自分を庇うことで爆発を受けた背中では、爆砕した剣の破片が多く突き刺さり、直視できないほどに痛々しい。

「セイナ様っ！どうしてっ!？」

シオンは訴える。どうして自分を助けたのかを。

自分を守ろうとしなければ、このような怪我を負うことはなかったはずだ。

あのととき反応が遅かったから、自分が逃げ遅れたことがわかったから。

シオンは、悲しみと後悔で表情を歪ませた

しかし、セイナは地面に横たわりながら、自分を見つめるシオンの頬に優しく触れ、シオンの無事を確認すると、嬉しそうに微笑んだ。

「よかった、どこも怪我をしていないようだな。」

その言葉は、シオンの胸に強く響いて聞こえた。  
この人は、どうしてこんなにも優しいのだ。

そのとき、嘲笑うような声が聞こえ、シオンはそちらに顔を向けた

「Ragnarokの時代に、各国から恐れられた魔狼も衰えたか！従者を庇って負傷だと？存外に脆く弱いのだな！！」

全身を包んでいた炎を消失させ、一人の女が姿を現した。

鮮やかな赤いロングの髪に、気の強そうな瞳、長身の体に軽装の鎧を身に纏い、整った顔を高慢な気持ちで歪め、嘲笑っている。

「どうした！これで終わりか、フェンリル！！」

「・・・さて、呼ばれたからには行かないとな。」

傷だらけのセイナは、それでも立ち上がろうと、膝に手を置いた。

「セイナ様、お許してください。」

「っ!？」

視覚出来ない速さで、しかし可能な限り優しく、シオンは手刀でセイナの意識を奪った。

倒れこむセイナの体を支え、地面に横たわらせると、自身の長いスカート裂き一枚の大きな布のようにして、セイナを覆った。

セイナの綺麗な黒髪に手を置き、愛しさを込めて優しく丁寧に撫でる。

「いつだって、貴方は優しすぎるんです。」



シオンは赤髪の女を黙って直視した。その瞳は静かである。

「それとも、あんたが相手でもしてくれらるというのか？あの、弱いご主人様の代わりに、」

「・・・黙れ。」

「なに？」

「調子に乗るなよ、糞虫が。」

赤髪の女は呆気にとられたような表情をしているが、それを無視して、シオンが静かな瞳のまま語り始める。

「セイナ様が弱いだと？笑わせる。お前ごとき糞の様な存在に対して怪我をさせずに捕縛しようとした方を相手に本気を出して、それで喜んでいるのか。ガキがお前？いや、頭に蛆うじでも湧いてるんじゃないのか？」

「何だどっ！！」

「悪いが、私はあの方と違って優しくはない。」

シオンの瞳が、相手を蔑む色に染まっていく。汚らしいものを見るような冷酷さを纏っている。

シオンは右目の眼帯に手を掛けた。

「お前は、私の一番大切な人を傷付けた。だから死ね。」

「言わせておけば、餓鬼があ！お前が死ね！！【全てを焼き尽くせ、イフリート】！！」

先程と同様に、赤髪の女の全身が炎に包まれていく。

怒りにまかせ、女が腕を振るうと爆風が起き、衝撃波となりシオンを襲う。

辺りが、爆風で起きた煙に満たされ、視覚できなくなる。

「なにつ!?!」

しかし、次の瞬間、女は我が目を疑った。

爆風のなか、先程と変わらぬ状態でシオンがその場所にいた。そして、眼帯に手を掛け、ゆつくりと言葉を紡ぎ始める。

「【我は鎖に拘束され、沼の底に沈められ、自由を奪われる。】」

周囲の空気が凍り付いていくかのように。ピピシと音を立てる。

『これは危険すぎるものだ。』女の感覚がそう告げている。

「【目前に広がるは無限の漆黒、ただ暗闇のみが我が隣人。】」

「くそがあ!!」

言い知れぬ不安を覚え、火を全身に纏った状態で、無我夢中になりながらシオンに襲い掛かる赤髪の女。

「【我は暗闇の中で牙を研ぐ。】」

「ぐあつ!!」

ハンマーで殴られたような衝撃と受け、女は何かに阻まれた。

そこで気付く、シオンの周囲に強力な魔力の壁が出来、彼女を守るように包んでいる。

内側でも風が巻き起こり、シオンの纏めていた髪が解け、長い髪が風に巻き上げられる。

その髪が生え際から、見る見るうちに銀色に変わっていく。

「【蹂躪の時は訪れた。解き放て、我は魔狼なり。】」

突風が巻き起こり、女は思わず目を瞑った。

^^ ^^

突風がおさまり、目の前の光景がクリアになっていく。  
そして、女は目の前に信じられない光景を見た。

銀色に輝く右の瞳。

これは、

「フェンリル……だっ！しかし！では、あの男は！？」

そんなはずはない。

大戦中に魔狼と呼ばれた人間はただ一人、セイナという名前の男  
だけだ。

では、いま起きていることは、いった何なのだ。

それに、銀色に変化した髪。先刻の男にはなかった変化だ。

偽者？模造品？いや、違う。

女の間接が、魔力を持つ者としての感覚が告げる

この、美しさの中に秘められた禍々しさ

『これが本物のフェンリルだ』

「勘違いをするな。私がフェンリルなのではない。」

女の思考を読んだかのように、目の前の少女が告げる。

その言葉、瞳、全身から溢れる力が女を圧倒した。

「私『も』だ。」

少女が、女に一步一步近付いていく。

女は、少女の瞳を正視したまま動かない。否、動けない。動けと命令する思考とは別に、震えが止まらないのだ。

「懸命に、醜く、足掻け。」

同時に、眼前から少女の姿が消えた。

## 魔狼（後書き）

最近、少し忙しく、更新が滞ってしまい申し訳ありません。

そして、今回は短いですね（汗）。反省です。

前回も書きましたが、バトルシーンって難しいですね。

他の方の表現とか、いいなあっと素直に思っています。

コメントとかあったら気軽にお願いします。

叱咤激励していただけると、赤いモバイルオーツ並に書けると思いますが。

## 圧倒

自分が攻撃を受けたのだと自覚したのは、体が何らかの衝撃によって飛ばされ、ボールのように地面をバウンドし、地に伏したときであった。

「っ!」

急いで体を起こし相手の姿を探したが、居ない。いや、まさか

「隙だらけだな。」

「つくあ!」

声が聞こえた瞬間、右胴体に強烈な一撃。体がくの字に折れ、そして確信する。

見えていない。視覚出来ないのか。

自分に起きていることが理解できない。

それに何故、あの少女は、

私に撃ち込んでこられるのだ？

イフリートによって、全身が高温の炎で包まれている自分を相手に武器を持たず、直接打撃を与えることは、自らにもダメージを与えることを意味している。

高位魔法とは、即ち血統による特異体質のようなもの。

生まれ持ったものであるから、維持することは呼吸をするように



例えば、  
「

シオンは女に見えるように、両手を前方に向かって掲げる。

「【イフリート】。」

「な、んだ・・・とっ!？」

女は驚愕する。シオンの両腕が炎に包まれていた。その魔力、その状態はイフリートにあまりにも酷似している。

「高位魔法。確かにその威力、存在は脅威ではある。」

「そんな、はずがああ!!！」

女は必死に体を動かし、混乱と共に、炎に包まれた腕を射程距離にいたシオンに向けて振るう。

しかし、その腕を躊躇いなくシオンは自らの手で受け止めた。

「だが、そのように弱点が少ないものだからこそ、大きな弱点がある。」

「ぐはっ!!！」

そのまま、女を引き寄せると、女の腹部に蹴りを放つ。その脚もまた炎に包まれていた。

女はそのまま、衝撃に飛ばされる。

「【過信】だよ。」

地に転がる女は、ただ苦しそうに呼吸をしながらシオンを睨みつける。

シオンは両手足が炎に包まれている。

「自分しか使えない、これ以上のものはない、そこから生まれる過信は容易に戦闘者としての能力を腐らせる。冷静に考えてみるよ、これだって、たかが魔力の応用なんだよ。」

そう言いながら、シオンは両腕の炎を纏う、消すという動作を繰り返す。

「どんな物だって壊れる。どんな者だって死ぬ。完璧なものなんて存在しない。」

再び、纏う炎を固定したシオンは自らの両手足を眺める。

「私の能力も相手の技の全てを完全に再現は出来ない。まあ、相性というものもあるし、無理やり魔力を変化させているわけだから仕方のないことだが。」

蹴りによって飛ばされ、距離の離れた女に向かって、シオンは歩き出す。

「それ以下に甘んじず、それ以上を望まなければ、拮抗することは出来る。後は純粹な生命体としての能力が勝敗を左右すると、私の師が教えてくれた。お前の魔法も、私にとっては相殺できればそれだけでいい。別に、それ以上の威力を私は求めない。」

朦朧とする状態で、首だけを動かし周囲を確認すると、大分離れたところからシオンがこちらに向かって歩いてくる風景が見えた。そこでようやく、自分がどれだけ派手に飛ばされたのかということを確認した。

女は思う、このままでは、

「勝てない。そう、思っているんだろ？」

シオンの声が、この戦場にあつて静かに響き渡った。

銀色の瞳が全てを見透かしているかのように輝いている。

女はいまだに動くことが出来ないでいる。

「勝てないというのは勝つ可能性がある人間が考えることだ。お前は どうしたら助けてもらえるかを考えたほうがお似合いだ。」

そのまま近付くと、シオンは女の首を左手で掴み、片腕で持ち上げていく。

シオンの身長が女よりも低いため、足を宙には浮かせていないが、女の足には力が入っていないため、全体重が首に負担を与え、苦しそうに顔を歪めた。

女は、とうとう維持が出来なくなったのか纏っていた炎を解き、生身の姿を晒した。炎に耐性があるようで、シオンの炎により体が一気に焼けていくことがないが、確実に衰弱していく。

「お前を殺すことは容易なことだ。それは今の状況を見ればお前のような低脳でも理解は出来るだろう。けれど、お前がセイナ様と対峙したとき、私が動かなかつたのは何故だか、わかるか？」

「ぐっ！！」

シオンが首を掴んでいた手に力を加えると、女の顔がさらに歪む。しかし、その反応に興味がないかのように、シオンは無表情で女を見つめている。

「セイナ様がそれを望んだからだ。何故、私が自分の身を守るためにフェンリルを使わなかったか、わかるか？」

シオンは銀色の右瞳<sup>みぎめ</sup>で女を見据える。

「この瞳がセイナ様のためにあるからだ。私の瞳、体、内臓、血、骨、髪の毛、その全てが我が主であるセイナ様の物だ。それは全て私のためではない、セイナ様のために使う。」

シオンの表情が笑顔を作るかのように変化していく、しかし、出来上がった表情はひどく歪んでいて、先刻までの少女のものとは思えないほどにサディスティックなものであった。

「あの人の存在が私の全てなんだ。だから、私はあの人を傷つけたお前の魔力が憎い、あの人を愚弄したお前の口が憎い、あの人を殺そうとしたお前の存在がとても憎い。だから存在しないでくれ。」

歪んだ笑みと懇願のような言葉とともに、右手に魔力を集中させていく。

使うのは【イフリート】と【エクスプロージョン】の組み合わせであり、超高温の炎による爆破。この至近距離から発動させれば相手の体を爆砕させ、肉も焼け尽くすだろう。

「……かな……れん、ごく……より、」

「……悪足掻きか。」

女の口が、か細く言葉をつむぎ始めると、シオンの銀色の瞳が、女の体に魔力が集中していくことが感じられた。

イフリートのように外側に魔力を纏うのではなく、どちらかといえば剣を爆砕させたときのように、内側に魔力を蓄積させているようである。

シオンのフェンリルは、完全な状態で発動された魔法を解析することで、再現を可能とするため、このような状況では相手が使ってくる魔法がどのようなものかわからないが、女の全身を巡る魔力の流れを見ると、使おうとしている術に必要な魔力を十分に捻出できていないことがわかる。

それならば、発動前に止めを刺せば事足りる。

「さよならだ。名もない蟲。」

「っ!？」

シオンは魔力を溜めていた右手を女に向けた。

## 圧倒（後書き）

お久しぶりです。

『今回も短い！』と思われた方には申し訳ないのですが、これにはちゃんとした理由があります。それはお楽しみにしててください。

もし、リクエストがありましたら、私の不出来なキャラ・世界設定の資料を掲載させていただこうか思っております。そんなんしてる暇があったら続き書けとか言ってくれると逆に嬉しかったです。



轟音が響き、シオンの目の前には爆発で大きく抉れた大地と

セイナに抱きかかえられ、気絶している女の姿があった。

「間に合ったか」

「セイナ様っ!？」

傷の痛みに、苦笑いを浮かべながらセイナは女を地面にゆっくりと横たわらせた。

思わず、声を上げたのはシオンである。

「セイナ様、お願いします。離れてください」

再び、シオンは右手に魔力を集中させ、横たわる女に向ける。だが、その近くにはセイナがいる。彼女を守るように。

セイナ様は彼女を殺さない。それはもとよりわかっていたことだ。しかし、あの女はセイナ様を傷付け、侮辱した。私は思う、あの女は生かしておく価値がある人間なのですか、セイナ様？

「セイナ様、離れて……。」

「……止めるんだ、シオン」

セイナは振り向き、銀色の瞳でシオンを見つめる。

その眼差しを受けたシオンに、先刻までの迫力はなく、向けている手は震え、表情は幼い子供が母親に懇願するように弱々しい。

「セイナ様っ! そんなヤツに生きている価値など

!!」

「やめろっ!!!」

「っ!？」

「それ以上言うな。シオン、命令だ。止める」

「・・・はい。」

力の限りを振り絞ったシオンの言葉は、空気の振動が伝わってくるほど、声を荒げたセイナに圧倒され、掻き消えた。

そして、その言葉の後に続いたセイナの命令を聞くのと同時に、シオンの体からは力が抜け、右手に集めた魔力も消沈していく。銀色の髪も徐々に元の黒髪に戻っていった。

セイナはシオンにゆっくりと近付き、シオンの頭に優しく手を置いた。

「いい子だ」

「っ!セイナ様、私　!」

シオンが言い終わる前にセイナが倒れこんでくる。

考えてみれば、シオンがセイナを昏倒させた一撃は、早々回復できるようなものではなく、加えて、ひどい怪我をしているのだ。その状態で、動いていることが奇跡に近い状況であった。

「セイナ様!セイナ様!!!」

意識が暗闇の中に沈む中でセイナはシオンの声を聞く。

『これじゃあ、あの時と逆じゃねえか』

ひどく場違いなことを考えながら、セイナは意識を失った。

^^ ^^

^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^

「・・・んん」

セイナが目を覚ますと、目の前にはうつすらと火の灯ったランプがあつた。

見慣れた天井、見慣れた壁、どうやら城内にある病棟の個室に寝かされているらしい。ふと、自分の手のひらが、ほのかに暖かいことに気が付いた。

「・・・セイナ・・・さま」

「シオン・・・」

傍らには、椅子に腰掛けた状態で、セイナの右手を両手で包み込むように握り、ベッドに上半身を寄せ、眠っているシオンがいた。セイナは上半身だけを起こし、左手でシオンの頭を優しく撫でた。頭を撫でられているシオンは、少しくすぐったそうな表情をつくりながらも、安らかな寝息をたてている。

しばらく、そうしていると、コンコンとドアをノックする音が聞こえた。

「目が覚めましたか？兄さん」

「ヨシユアか、ああ、おはよう」

「おはようではないでしょう兄さん、まったく兄さんは  
「ん？どうした  
「！？」

「なんと、うらやま、いえ、何でもありません」

部屋に入ってきて、一瞬固まったヨシユアであったが、すぐに平静に戻り、ベッドの傍らに移動し、深く溜息をついた。

「単刀直入に言えば、ただ、驚いたとしか、」

「どんな状況だったか聞いていいか？」

「ええ、血だらけの兄さんを背負ったシオンさんが城に戻ってきて、開口一番に『医者を出せ！！』ですからね。強盗か何かと思いましたがよ」

「それは、驚くな」

セイナはその光景を想像し笑うものの、ヨシユアは苦笑を浮かべていた。

「加えて、刺客は平原にほったらかしですから。本当にこの方は有能なのかわかりなくなります。」

「とびつきり有能さ、この子は」

「・・・兄さんは、シオンさんには特に甘いですね。」

「そんなことはねえさ。」

話をしながら、セイナはずっとシオンの頭を撫でている。それを見ていたヨシユアはなんともいえない表情をしていた。

「ところで、刺客の女はどうした？」

「はい、私もその件についてご相談があり、参上いたしました。」

先程まで、緩んでいた二人の表情が、真剣なものに変わる。

話は、ヨシユアから始まった。

「捕縛後、城内にて勾留。念のために対魔術師用の監視を二名ほど置いてありますが、グレイスさんの見立てでは、2日間は目を覚まさないだろうと」

「グレイスか。それなら、信用できるな」

「ええ、加えて、兄さんの治療もグレイスさんが診て下さいました。」

「それじゃあ、また、酒を要求されそうだな。後は」

「そして刺客の身元のほうですが、こちらは不明となっております。」

「なっている、か。それなら、だいたい検討はついてるんだろ？」

「その通りです。そうだったら厄介だと思える予想ではありますが」

「そうか・・・ヨシユア、調べて欲しいことがあるんだが」

「はい、どのような」

「ローズフェルトへ情報を飛ばせるか？」

セイナは、いくつかの言葉をヨシユアに伝えた。それを聞いたヨシユアは、軽く頷く。

「容易に」

「そうか、頼んだぞ」

「ただちに、行わせていただきます」

ヨシユアはそのまま入り口に向かって歩き出し、ドアに手をかけた状態で止まった。

そのまま、セイナの方へ、上半身だけ振り返る。

「ところで、シオンさんは、いつまでそのままなのですか？」

「ああ、久しぶりにアレを使ったみたいだから、明日までこのままだろ。俺が言うのも何だが、不便な力だ。」

「いえ、まあ、そのままというのは頭ですね・・・手と、言いますか・・・」

「何言ってるんだ、ヨシユア。後半が良く聞こえなかったぞ」

「・・・お気になさらないでください」



『シオン、目が覚めたの？』

シオンと呼ばれた少女の最愛の母である、ミアアの声がドア越しに聞こえた。

『うん、お母さん』

『入って、いい？』

『うん』

ゆっくりと部屋に入ってくるミアア。

初めて見る母の姿は、涙に濡れてよく見えなかった。

ミアアはそんな娘を優しく抱き締めた。

『お母さん、見えないよ』

『良かった、シオン。本当に、良かった』

シオンは頬に雫が落ちるのを感じ取った。

ミアアに抱かれながら、その鼓動と暖かさから、この人が母なのだ、シオンは改めてそう思った。

『そうだ、お母さん。お兄さん、お兄さんは何処にいるの？』

その言葉を聞いて、ミアアは表情を曇らせた。

シオンは心音でミアアの気持ちを感じる。これは、悲しみ。

ミアアはシオンと正面から向き合って話し始めた。

『落ち着いて聞いてね、シオン。あの方は、街を出て行かれたわ』

『え、そんな、私、ちゃんとお礼言ってるよ。』

『本当よ、シオン。あの方はおっしゃっていたわ。』



そこで、記憶がぶっつりと切れている。  
シオンは現状を確認するために辺りを見回すために寝たまま体を  
反転させた。

セイナの顔が目の前にあった。

「せ、せ、せ、せ、セイナ様っ！！！!?」  
「うん？・・・シオン、もう朝なのか？」  
「あ、はい。・・・いえっ!?そ、そういうことではなくてですね  
!-!-!-」

「騒がしいぞ、シオン。近所迷惑だ・・・」

「え、ちよつと、セイナ様！」

「もっ、少し、寝させ・・・ろ」

「はっ」

セイナは寝ぼけているのか、シオンを抱き寄せ、そのまま眠って  
しまう。

状況を整理できず慌てていたシオンであったが、最後は抵抗をせ  
ずにセイナに身を任せた。

結局セイナが目を覚ましたのは、昼過ぎであった。

^^  
^^ ^^

ベッドの背もたれに背を預け、上半身だけ起こしているシオンに  
対して、セイナはベッドから出て、横にある椅子に座っていた。

シオンは自分も起きて大丈夫だと言ったが、セイナに休むよう命  
じられ、今の状況に甘んじている。ただ、確かにシオンは体の気だ  
るさを、まだ感じていた。

「昨日は、申し訳ございませんでした」

唐突に、シオンが謝罪の言葉を発した。

昨日のこと、それはシオンがセイナの命令を聞かず、刺客の女の命を奪おうとしたことについてである。

「シオン。簡単に命を摘み取ることを俺は好ましく思っていない」  
「はい」

セイナはシオンに向けて話す、そこには命令無視に対する怒りは感じられず、ただ、諭すような心の静かさと真剣さが感じられた。

「相手にも何か言い分があるのかもしれない。俺を殺したい確固たる理由があつたのかもれない。恥かしい事だが、俺は君も知つている通り清廉潔白とは言い難い人間だからな。それを聞かずに命を摘み取ってしまったえば、殺された者は何のために生きたのか、何のために死んでいったのか、その意味の全てを奪ってしまうことになる」  
「はい」

「昔、俺が命の価値について話したこと、覚えているか？」

セイナは少し遠くを見るような視線で、過去を回想する。

「あのとき、俺は、命の価値というものがわからないと言つた。それは今だつて変わらないさ」

ただ、とセイナは続ける。

「生きていることには価値がある。それは相手から見つまらないもののだとしても、本人にとってはかけがえのない価値を持っている。」

それは誰にも等しくだ」

セイナはシオンを真っ直ぐに見つめる。

それに応えるように、シオンもセイナを真っ直ぐに見つめた。

「その価値を自分の都合で一瞬のうちに奪うんだ。それならば、大切に奪え。いいな」

「はい、セイナ様」

言つて、セイナは大きな溜息をついた。

「・・・これは王としてではなく、ただのセイナとして言わせて貰いたい」

セイナは立ち上がると、ベッドに座り、シオンへの距離を縮めた。

「本当は、シオンに立場を強制させていること、すまないと思つている。俺がもつと有能であつたら、君にこんな苦悩を、こんな覚悟をさせずに済むのだろうな」

「シオン様っ！私は、そのような。。。」

「だが、俺は君を手放したくはない」

セイナは、悲しみを含んだ笑顔をシオンに向けると、シオンの手をとり、シオンが自分にしてくれていたように両手で包み込んだ。

「ありがとう。いつも君には世話をかけてばかりだな、俺は」

「セイナ・・・様」

「俺の隣にいてくれること。心から感謝しているよ。シオン」

「勿体なき言葉でございます。セイナ様」



シオンの声が青年の言葉をかき消す。

『私は、お兄さんに感謝してる。お兄さんは、私の願いを叶えてくれた。暗闇の中にいた私に光をくれた。私はそれだけで十分。』

シオンは青年の首に手を回し、しがみつくようにして抱きつく。

『ありがとう。お兄さん』

『・・・そうか』

シオンが、そう言うと青年はどこか安心したように破顔した。

『私の願いが叶ったのなら、お兄さんの願いも叶えなくちゃ』

『俺の・・・願い』

『お兄さんが背負ってるもの、私も一緒に背負ってあげる』

『いや、それは、』

『決めたの。そうするって』

シオンが青年から身を離すと、お互いが正面から向き合うようにして立った。

『だから、またきつと、会えるよね』

『だからな、それは』

『会えるよね!』

『・・・ああ、そうだな、きつと』

シオンに圧され、青年が苦笑する。ただ、その表情はどこか穏やかであった。

青年はシオンの頭に手を置いた。

『どんなに離れようとも、その瞳が縁となって再び我らを結ぶだろ  
う』

『おまじない？』

『似たようなものだ』

『私、絶対に忘れない！』

そして、青年は再び歩き出す。

離れていく青年の姿を見つめながらシオンは大切なことを失念していたと思ひ出す。

『お兄さん！！私、シオン！！アマネっていつの！！お兄さんは！！』

青年は振り返り

『セイナ、セイナ！！カインズだよ。シオン』

セイナと名乗った青年は、もう一度シオンに手を振り、歩き出した。

決着　〜一日のエピローグと過ぎ去りし日々の思い出〜（後書き）

誤字脱字を十分にチェックしないままの投稿になっていきますので、結構間違いがあるかもしれません。随時直しますのでお許しを

前回、短いには意味があるみたいなのを後書きに書きましたが、それはずばり『長すぎると題名と内容が合致しない』という、私人の見解です。

そして、今回は少し長めに書いて現在試験中です。

皆様の反応を見ながら、短文投稿にするか、長文投稿にするかを決めていきたいと思っています。

よろしくお願いします！

## 罪の在り処

セイナが負傷して城に運び込まれた翌日、自室でヨシユアは、現在までにローズフェルトから手に入れた情報を整理していた。

木製の大型の机に備え付けられた椅子に座り、報告された情報が纏められた紙の束を一枚一枚咀嚼するように黙読していく。

傍らには、隠密隊の制服を着た、小柄な少女が、少し緊張した面持ちで直立していた。

「アルフ、いまのところ、これだけですか？」

「は、はい！以上でありますヨシユア様。我々の力が及ばず、不満な点も多々あるかと」

「いえ、現段階では十分な情報量です。ありがとうございます」「お褒めにあずかり、恐悦であります！」

アルフと呼ばれた少女は依然緊張したまま、ヨシユアに返答していた。表情は少し紅潮している。

アルフ＝ステイングラは、女性でありながら、少年と少女の中間に存在しているような中性的な風貌をしており、どこか幼さを感じる可愛らしい外見をしているが、実力で隠密隊副隊長の地位に登りつめた猛者であり、年齢はヨシユアより4つほど若い21歳である。加えて、とても似ていないが、隠密隊隊長であるウォルフの血縁でもある。

普段は、隠密隊の指揮をとっているが、ある事情によりセイナに命じられ、ヨシユアの護衛も兼任している。

「・・・さて、だいたい予想の通りですね」

ヨシユアはそういつて資料を手に苦笑する。

現在手元にある情報は、セイナとヨシユアが欲したもののうち七割方揃っている。さらにそのなかの実に九割が『そうなたら厄介だ』と想像していたものが現実として確証が取れる情報であった。

しかし、そのような状況下でありながら、ヨシユアは許容範囲内だと冷静に考えている。

それが、イリアにて右に出るものがないといわれる頭脳を持つ、智将ヨシユア「カインズと呼ばれたる所以である。

「アルフ、すみませんが、これらの書類を処分していただいてよろしいですか」

「はい！」

「毎度のことですが、あまり固くならないください。アルフ」

「はい！」

「・・・ゆっくり行きましょう」

ヨシユアはアルフに先刻までの書類を渡す。

アルフが書類を持つと、一瞬にして書類が消失した。

書類の内容はヨシユアの頭の中に記憶されている。それを要約してセイナに伝えるのが、優先事項である。

「ヨシユア様、どちらに行かれますか」

「兄さんのところへ。アルフは引き続き、隊の指揮を執ってください  
い」

「了解です」

ドアノブにヨシユアが手を掛けたとき、窓からバサバサという羽音と共に一羽の伝達用鳥が飛び込んできた。

鳥はアルフに銜えていた書簡を渡すと、再び飛び立っていく。



の金髪が特徴的で目鼻立ちが整っているため、総合的に迫力のある美人であるが、反面服装がだらしなく、サイズが合っていない小さめのシャツは彼女の豊かなバストを強調し、ボタンの隙間から下着が見えてしまっている。またシャツの上に纏まとっている白衣も、ただ羽織っているだけの様相であり、肩が露出してしまっほどに着崩されている。何より、表情が面倒くさそうである。

ただ、言葉遣いやそのような態度をとっているにもかかわらず、セイナが気にするような様子はない。

「まあ、その通りだな」

「んで、何の用なの？ヒマな人」

「そう言うな、この前の礼に、な」

そう言って、セイナはテーブルの上に一本の瓶を置いた。酒である。

「おお、アンタにしては気が利くじゃない。それで、銘柄は……つと、前から飲みたかったヤツ！これ、中々手に入らないのよねえ。」

「喜んでもらえて何より。先日は助かった、ありがとう、グレイス」

グレイスは酒瓶を抱き締め、先程までの表情が嘘のように嬉しそうにしていた。

「構いやしないわよ、あの程度。それにしても、よくこの酒がいいって判ったわね」

「シオンが、『グレイスさんに』って、言って渡されたものだ」

「えっ！？嘘っ！私の天使エンジェルがっ！？」

目を丸くして、驚きと喜びが混じり合ったような表情をするグレイス。

そして、立ち上がると酒瓶を部屋の奥にある錠前の付いた棚に仕舞い、戻ってきた。

「・・・飲まないのか？」

「天使からのプレゼントよ？そんな貴重なものを出しっ放しにする人間が存在する？」

「んな事、俺に聞かれてもな」

「それより、アンタ。私の天使を困らせてないでしょうね？」

「・・・ああ」

「例えば、アンタが私の病院に運び込まれて、それが簡単な傷だとしても、私が『コレは大変、強い毒が体に入ってしまった』とか言つて、アンタに毒を注入することも」

「シオンの笑顔が俺の全てといっても過言ではない」

「お互い、良い関係でいたいものよね」

グレイスの態度に苦笑を浮かべるセイナ。

セイナとグレイスは、セイナがイリアの王になる以前から親交があり、グレイスをイリアに住むよう誘ったのもセイナである。

普段は、昼間から酒を飲み、自堕落な生活を送っているが、こと医学的な技術に関しては特一級である。また、多方面にわたる知識を持つている知識人であり、イリアにおいてセイナが強い信頼を寄せる人物でもある。

「それで、本題は何なのよ？」

「お見通しか」

「でなきゃ、アンタからわざわざ来ないでしょ」

特に態度も体勢も変えず、セイナに向き合うグレイス。ただ、そ

のリラックスしたグレイスの状態が、彼女の懐の深さを表しているようにもある。

「いま、捕らえている女についてなのだが」

「ああ、あの子。それで何が知りたいの？」

「わかったこと全部」

「あんまり、がつつくと嫌われるわよ」

緩慢な動きでグレイスは床に積み重ねられていた書類のうち、一部を手にとって、しげしげと眺めた。どうやらカルテのようである。

一通り目を通した後、グレイスはカルテをはじめに置いてあった場所とは違う場所に置くと、話し始めた。

「個人的に気になることはあったけど、まずは基本的なことからでいいかしら」

「ああ」

「怪我の度合いは、肋骨が何本か折れていたのと、腕の骨にひびが入っていた程度。それよりも魔力消費のほうに激しかったみたいね。丸二日起きないっていう診断も怪我より魔力に起因しているわ」

「魔力の性質は？」

「アンタもわかっているとは思うけど、『赤』よ。純度は最高レベルだったわ、彼女。あれなら分家筋というのは考えられないわね。おそらく直系よ」

それを、聞いても特にセイナは驚かない。

「だいたい、予想していた通りであつたし、あくまで今のところ確認事項を聞いているに過ぎない。」

それよりも本題は、グレイスが『気になる』と言った事柄である。おそらく、グレイスは、普通の医者が診ても気付かないようなことに気が付いているはずだ。

「後は若くて生娘、そんなとこよ。それでは応用といくわよ。ああ、これ別料金だけど、いい？」

「ああ、問題ない」

「んじゃ、私の気になったところなんだけど」

そう言いながら、グレイスは自分の頭を指差す。

「彼女、相当いじられているわよ。しかも、かなり巧妙にね」

グレイスは眉間に皺を寄せながら、話を続ける。どうやら彼女にとっても面白い話ではないようだ。

「アンタがフエンリルを使えば、まあ、あるいはといったレベル。要は相当高いレベルのもの。恐らくは禁呪、それに類するものね」

禁呪とは、その危険性から封印された古代の魔術であり、そのほとんどもが、使用者に対しても相応の対価を要求するものであり、無論、まともな神経で使用できる代物ではない。

しかし、裏を返せば、対価さえ払えば強力な魔術を使用できるということでもあり、その誘惑に飲まれてしまった術者は少なくはない。

現在、発見されているものについては、各国において嚴重に管理されているが、未発見のものも存在する。いずれにしろ、問題としては大きい。

「どんな命令に縛られていたのかは完璧にまでわからないけれど、いまは解呪されているわよ。たぶん、一時的に魔力が空っぽになっただけだからじゃないかしら」

「そんなことで解説されるものなのか？」

「あくまで、例えの話よ。ただ、この手の魔術は、いかに、それが自分の意思によって為された行為であると偽れるかを重要視するわ。なにより、危惧すべきは足がつかうことだからね。よって、命令が完遂できなければ、人形としては用無しなのよ。そこで、手っ取り早く情報を隠蔽するにはどうすればいいか」

「・・・自爆だな」

「その通りよ。彼女、そういった行動を起こさなかった？」

セイナは思い出す。

確かに、シオンが彼女に向けて魔術を発動させようとしたとき、自分の体に魔術を集中させていた。

「負けが確定したとき自我を持ったまま自動的に自分を殺すシステムを植え込む。これは、簡単な魔術ではないわ。壊れている人間なら簡単、少し背中を押してあげるだけで事足りるわ。でも普通の人なら、生まれながらにして自分の死に対して制御装置を持っているわ。それがなければ生まれてから生きるといふ価値を否定することになるから。その生まれながらに持つ本能を捻じ曲げるなんてね。」

グレイスが懐からペンを取り出し、紙に一本の線を書く。

「例えば、そう、『ペンは書くために用いるもの』というのが自然なことよね。食べたり、刺したり、そういったものはペンからすれば不自然な行為なの。この魔術は、ペンが行うべき目的を食べたり、刺したりということに自然な形で置き換える。たぶん彼女は自分の行為が意に反したものであっても自然なこととして受け入れていたはず。」

持っていたペンの先をセイナに向ける。

「しかし、想定外のことが起きた。標的の近くに自分を圧倒する力を持つ者がいた。結果、目的を達成するために応戦するものの、体力もなくなり、自爆するための魔力もなくなった。せめて魔術の存在を悟らせないために自動的に解呪された。とりあえずこんなところじゃないかしら」

「なるほど、しかし、そうだとすると、少し都合が良すぎる解釈ではないか？」

「禁呪は不明な点が多いのよ。まあ、表に出ないから仕方がないのだけど。なかには魔術自体が独自の意思を持つものだってあるわ。彼女に掛かっていたものが最良の選択を自ら判断したとしても可笑しくはないわよ」

「そうか」

セイナは腕を組み考える。

思っていたより、少し厄介なことになるかもしれない。

そのセイナを見て、グレイスは不満げな表情をしている。

「アンタ、ひとつひとつの反応が薄いから張り合いがないのよね」

「いや、これでも十分驚いているぞ」

「さようですか」

「それにしても、流石だな」

「医者として、人体のエキスパートを語る身としては、当たり前  
の技量よ」

グレイスの顔には余裕の笑み、指を軽く弾くとそこに青い静電気のような閃光が走る。

「どんなことでも、脳や体は記憶している。それらが発する信号を  
読み取ることが出来れば、簡単なことなのよ」

「それが、誰にでも出来れば、苦勞はしないさ」

セイナは席を立ち、身支度を整える。

「追加料金については、また何か持つてくる。それまではツケとい  
てくれ」

「楽しみにしてるわ。それと、私の天使をそろそろこちらに譲つて  
くれないかしら？そしたら、今後、アンタには無料で奉仕するわよ」

「ああ、断る」

「ケチ」

いつも繰り返される一連のやり取りに、お互い顔を綻ばせる。

セイナは後ろ手に手を振ると、グレイスは気だるそうに片手を上  
げて見送った。

^^ ^^

^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^

セイナが病棟に運び込まれた日から3日後、大広間の玉座にセイ  
ナ、両翼にシオンとヨシユアが立ち、大臣たちはおらず、騎士団の  
数人が入り口近くに待機しているだけであり、その空間における密  
度の低さが、緊張感のある空気を漂わせていた。

おもむろにセイナが口を開く

「連れてきてもらってもいいか？」

「はい、兄さん。アルフ、ここに！」

ヨシユアと呼ばれ、広間の入り口から二人の人間が入場してくる。

一人は隠密隊副隊長アルフ、そしてもう一人は手錠を掛けられ、  
飾り気のない白い服を着せられた赤髪の女性である。手錠には紐が

ついでおりアルフがそれを手にしている。

広間の中央まで進むと、アルフと女は静かに跪いた。

「アルフ、彼女の手錠を外してはくれないか？」

「よろしいのですか、陛下」

「問題ない」

「それでは」

少しの困惑、しかし、アルフはセイナに言われるがまま女の手錠を外した。

セイナの横にいたシオンが背負っているバスタードソードに手を掛けようとしたが、それをセイナは片手で制した。

女は、手錠の掛けられていた場所を確認するように手でこすると、跪いたままの姿勢でセイナのいる方向へ視線を向けた。

「いまから、質問をする。正直に答えてくれ」

セイナは彼女と視線が合うと、彼女に対して話を始める。

女はセイナの言葉に首肯した。

「さて、事実確認だが、君は俺を殺そうとしたね」

「ええ」

「お前、セイナ様に向かってその口の利き方はっ！」

「シオン、大丈夫だ」

「・・・はい、申し訳ございません」

「君も、そのまま構わない。ただ真実を教えてくれればいい」

セイナの直球の言葉に対して、女の返答は冷静であり、達観して

いるというよりはどこか覚悟のようなものを感じさせる。  
シオンを落ち着かせ、セイナは質疑応答を再開した。

「それは、君の意思によって行われたことなのか？」

「……」

「正直に答えて欲しい」

「……わからないわ」

「その理由を聞いてもいいか」

「私は、あるとき確かに貴殿を殺そうとした。自分の意思で、その記憶も残っている。だけど、殺したいと思っていた理由が今の私にはわからない。目的があるのに、そこに至る過程が空っぽなのだ。しかし、私に言えることはない」

「そうか」

「信じてもらえるとは初めから思っていない。あくまで理由は私の脳内に存在するものなので立証は不可能だ。ただ、貴殿を殺そうとした事実だけが確実に存在しているのだから」

女は、どこか自嘲気味な笑顔を浮かべ、言葉を発し続けている。  
しかし、その瞳はセイナを捕らえ続けていた。

「私の頭がおかしいと、狂人だと、思っているのだろうか？」

「……」

「私を殺せ。国家の最高権力者を襲撃したのだ。それだけの罰を受ける重さの罪がある」

「罪に対して、同等の罰が必要とするのであれば、それは重過ぎる罰ではないのかと、俺は考えているが」

「一の罪に対して二の罰を与える。それにより人は罪の重さを知ると父が教えてくれた」

「……ヨシユア、剣を貸してくれ」

「どうぞ、兄さん」

セイナはヨシユアからロングソードを手渡されると、そのまま、真っ直ぐ女に歩み寄った。

そして、女の正面に立つと、剣を頭上に高く振り上げた。

女はその姿を確認すると、首を差し出すように頭を下げ、目を閉じた。

広間は静まり返り、呼吸の音さえ聞こえないほどの静寂が訪れる。

「最後にもう一つ質問する。これは別に嘘をついても構わない」

静寂の中、セイナの声が響き渡る。

「死にたいと、思っているか？」

女はセイナの質問に、俯き目を閉じたまま答えた。

「死にたくない、それが普通だ」

「そうだな、俺もそう思うよ」

セイナは、そのまま剣を振り下ろした。

## 罪の在り処（後書き）

お久しぶりです（待ってないかもですが）

更新が滞りまくり、呆れ果てた方も多くいらっしやるかと思いますが、実は私生活で変化がありまして、簡単に言いますと職が変わったわけです。

しかして、いままでの生活スタイルやら時間やらが大きく変わり、ごたごたしていたものですから更新できなかつたわけです。大変申し訳ない。

これからは、土日更新がメインとなりそうです。

イレギュラーもあるかとは思いますが、其れはご愛嬌で

## 紅の進む道

「ふあ、ああ、面倒くせえ」

大量の書類の前で、大きな欠伸あくびをしながら、セイナは気だるそうな表情を浮かべていた。

場所は、重要書類を保管する書斎であり、幾つも背の高い本棚が余裕を持って並んでいるほど部屋は広い。城でも一部の者にしか立ち入りが許されておらず、静かなため、セイナが集中して仕事が出るようにと、ヨシユアが書斎の一面を改装して、書斎の中に仕事部屋を造った。

セイナはそこで朝から、書類を検閲し、判を押す作業を繰り返していたが、今日中に終わるかどうかわからないくらいの量の書類と、ひたすら繰り返しのくらい続けていたのかさえ忘れてしまった判を押す反復動作に嫌気が差し、やる気が完全に失せていた。

部屋の中央に大きな机、セイナは背もたれに、もたれかかるようにして椅子に座り、その横にはヨシユアが立っていた。

「ヨシユア」

「なんですか、兄さん」

「世の中には適材適所という言葉がある」

「ありますね」

「この言葉は、業務を的確かつ円滑に進めるために必要なことを凝縮した素晴らしい言葉だな」

「そうですね」

「それでは、今やっている仕事は俺にとって、適材適所なのか？」

「……さあ、仕事を再開しましょう。兄さん」

「おいっ！？いま誤魔化したろ！卑怯だぞヨシユアっ！！」

「毎日ちゃんとやっていたら、こんなことにはならないですよ」

連日のセイナの脱走から、今回は決して退かないヨシユアを相手に、セイナは完全に劣勢に立たされていた。

そんな問答のなか、ドアをノックする音が部屋に響いた。

「セイナ様、お茶をお持ちしました」

「ああ、シオンか。入っていいぞ」

陶器の茶器を一式載せた銀色のカートを押しながらシオンが入場してくる。

「大丈夫ですか、セイナ様。お顔の色が優れていないようにお見受けしますが」

カートをセイナの近くまで移動させると、シオンがセイナの表情を見て、心配そうな表情をつくった。

その後、シオンは視線を移動させ、ヨシユアに憎々しげな視線を送るが、涼しい顔で受け流されてしまった。

「ヨシユア、こういう仕事はどうにも肌に合わん。なあ、シオンもそう思うだろ？」

「陽光の下で輝いてこそ、セイナ様です。そのような仕事は何処かの執事に任せましょう」

シオンの視線を受け、セイナはシオンに問い掛ける。シオンはその問いに、まるで答えが用意されていたかのような素早い反応で返答した。

ヨシユアがシオンに憎々しげな視線を向けたが、シオンはそれを嘲笑うかのような瞳で応戦した。

「それに、あんなことがあった後だ。仕事する気にはなれんよ」  
「セイナ様」

セイナがそう言つと、シオンの表情が曇つた。

「・・・最近、特にお前たちには苦勞をさせた。ここは皆で少し羽を伸ばさないか？」

「セイナ殿、そういつた雑務が国の礎となるのです。王たる者、それを怠るべきではないかと、私は思います」

三人とは違う声が、本棚の影から聞こえてくる。  
皆が、視線を向けると声の主が姿を現した。

背が高く、鮮やかな赤いロングの髪に、気の強そうな瞳が特徴的なメイド姿の女性である。

その姿を見たシオンの表情の曇り方が一層濃くなった。

「居たのか、猪女しごめごな」

「ああ、それに何か問題があるのか？狂犬」

二人が視線を合わせた瞬間、室内の緊張感とその密度を増した。

「猪女、お前は主人の行動に口を出すことが、畏れ多いことであるという初等教育を受けてはいないのか？」

「主が道を誤ろうとすれば、それを正そうとするのは従者として当

然の役目だ。それに私の主はセイナ殿であつてお前ではない。私に命令するな、狂犬」

「仕えているのなら、主人には『様』を付ける」

「呼び方はセイナ殿から許可を頂いている。お前が指図するな」

瞬く間に舌戦が繰り広げられる。

その光景を見て、セイナは苦笑し、ヨシユアは溜息をついた。

「兄さん、どうにかならないものなのですか？あの人達は」

「俺は、仲良くしてもらいたいと思っただが、出逢い方が最悪だったからな」

「まあ、それはそうと、私としては彼女の意見に賛同いたしますが」

「・・・陽光の下の方？」

「無論、国の礎の方です」

^^ ^^

^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^ ^^

静寂に包まれた広間に響き渡る、鋭い炸裂音。

「刑は下された。皆異論はないな」

セイナの目の前には固く目を瞑った女が、先刻とは変わらぬ状態で存在していた。

剣の先は、広間の床に傷をつけている。

セイナは剣を床に置くと、彼女と目の高さを合わせるように屈んだ。

「・・・何故、殺さなかった」

女は聞いた。その目には疑念の気持が籠っている。

「ある人より、君の記憶が混濁している理由であろう推論を聞いて、試した。そう言ったら怒るか？」

「当たり前だっ！そんなふざけた理由で！！」

「だが、それ故に裁く者は罪を見極めなければならぬ。人は決して人の命を軽んじてはいけないのだ」

「っ！？」

「先刻の父君の言葉は、そう続くのではないのか？ライア＝ローズフェルト姫殿下」

女の表情に動揺が現れた。

セイナは、それを特に気にする様子はなく、話を続ける。

「俺はあらかじめ、君に言ったはずだ、『正直に答えてくれ』とね。そして、君は答えた。ならば、俺はそれを信じる」

「私が、嘘をついているとは思わないのか。貴殿を欺き、再び命を狙おうとしていると疑わないのか」

「欺く欺かない以前に、いま君には身体や魔力に何ら制約を付けてはいない。俺は殺ろうというのなら、今が絶好の時だ、と普通はそう思わないか？」

「しかしっ！」

「もし、君が嘘をついていたのなら、それは俺の責任でもある。そのときは俺が責任をとればそれで構わない。それに」

セイナは真剣な眼差しで、ライアの瞳を覗き込む。

「死にたくないと言った君の言葉。それを何よりも信じたい」

セイナはライアの肩を一度軽く叩くと彼女に立ち上がるように促した。

ライアもそれに応じて静かに立ち上がる。  
それを確認してから、セイナは口を開いた。

「カイル！メイス！」

「はっ！」「はっ！」

入り口の若い兵士に向かって、セイナが言葉をかけると、二人の兵士はその場で跪いた。

「今日のこと、他言無用で頼む！お前たちのことを信用しての頼みだ、聞いてくれるか」

「ありがたきお言葉にございます。陛下！」

「その命、しかと承りました！」

「ありがとう。お前たちは散会としてくれ！」

「はっ！」「はっ！」

入り口にいた二人の兵士は、セイナに向かって一度深く礼をする  
と、入り口から立去り、扉を閉めた。

再び、対面するような位置で、セイナがライアの前に立つ。

セイナが自分の後方に控えていたアルフに目配せをすると、アルフは一步前に進み出た。

「ここからは少し込み入った話になる。先日、興味深い情報が手に入った。君と、恐らくこの件に関係することだ。アルフ、頼む」  
「かしこまりました。陛下」

アルフが軽く指を鳴らすと、後方の闇の中から一人の男が姿を現した。

男は、アルフに書簡を手渡すと、現れたときと同じように音もな

く姿を消した。アルフと同じ隠密の服装、どうやら彼女の部下のようである。

アルフは手渡された書簡から中に入っている紙を広げると、それを読み上げていった。

「【ローズフェルト第一皇女ライア＝ローズフェルトが逆賊として国外へ逃亡。発見次第、捕縛、引き渡しへの協力を請う。尚、生死は問わない】という文書の存在がローズフェルト国にて確認されました。文面からして、恐らくこれからローズフェルト王室より他国へ流されるものです」

「なっ!？」

「・・・続けます」

ライアの表情が驚愕のそれに変わる。

アルフは一度ライアを確認し、言葉を続ける

「信じられないという表情をされていますが、残念ながら現実です」

「そんな馬鹿なことがっ!!」

「エリシア＝アインベルク。此度の情報提供者です」

「エリシア、だと」

エリシアという名前を聞いた途端、驚愕に支配されていたライアの表情に動揺が入り混じる。

その反応から、ライアにとってエリシアという人物がどのような存在なのか、皆、容易に想像がついた。

「はい、そのように申されておりました。今回、貴女の国深層にあった情報は彼女から得た物が多い。私たち隠密を見抜いた上で接近してきました。恐らくはある程度こちらの状況も推察した上で、正体を露呈した言い訳であると思われるかもしれませんが、彼女、有

能ですね。」

「エリシアは、エリシアはどうしたんだっ!!」

「我々に情報を提供した後のことは何も。しかし、少し危険な感じがしましたね。若さ故の激情、有能ですが…まだ、未熟」

明らかな動揺を表すライアの反応に対して、アルフの対応はどうか冷たさを感じるものであった。

広間に残った、セイナ、シオン、ヨシユアは何も言わず、その状況を静観している。

「私見での判断にございます。あの方、命を捨てる覚悟をしております」

「頼む、彼女に私の言葉を伝えてくれ!」

アルフの言葉に、ライアの感情が弾ける。

常に危険に身を晒す世界にある人間の感性は、死という感覚をより鋭敏に感じ取ることが出来る。

ライアはアルフを一目見て、彼女が一流であることがわかった。それならば、彼女の死に対する言葉は、それだけの信用と危険性を帯びていた。

「残念ながら、許可できません」

壇上にいるヨシユアが言い放つ。その瞳から感情を読み取ることが出来ない。

「何故だっ!?!」

視線をヨシユアに向け、ライアは食い下がるような強い口調で問う。

その必死さは勢いを増し、冷静さの欠如を如実に表していた。

「落ち着いて考えてください。エリシアという方、我ら隠密の出自は聞かずに情報を下さいました。それは、我々の匿名性を尊重した心遣い。次に我々から彼女に接触し、万が一我が国のことが知られれば、最悪」

ヨシユアの視線はライアを貫くように鋭くなる。

「戦争ですよ？」

その一言で、ライアは凍りついたように動けなくなった。

冷静に考えれば、誰でもわかることだ

王族という立場。その大きさと重さ。

国から反逆罪で終われる身である自分が他の国で生きて匿われていることが、露見すれば、それは国家の裏切りとして、大きな亀裂を生じさせる。

そうさせないためのエリシアの行動。  
しかし

「・・・たった一人の友なんだ」

ライアは縛りだすような声を発する。

「たった一人の友なんだっ！父上が亡くなったときも、母上が亡くなったときも、傍で支えてくれたのはエリシアなんだっ！！お願いだ、何だっでする。お願いだっ！！」

絞り出した声は、次第に大きく。

広間に響き渡る悲痛な叫び。

一国の姫の姿は、あまりにも小さく見えた。  
ヨシユアはその懇願を正面から受けて、なお表情を変えることはない。

「何を伝えたいんだ？」

ライアの叫びに介入する質問、発したのはセイナである。

「私が生きていること、そして私のために命を無駄にして欲しくないこと。生きていてくれと伝えたい……」

エリシアは死ぬ気だというアルフの言葉。

長く、共に歩んできた経験からライアはこのままではその通りになると確信する。

ライアのために、エリシアはいまその命を捨てようとしている。  
それだけは、嫌だ。彼女はたった一人の心許せる親友であり、大切な家族なのだ。

「……ヨシユア。俺が許可する。彼女の言葉を運べ」

「……えっ？」

場の空気から一瞬、全ての音が掻き消える。

ライアは呆然とした表情で、セイナを見つめた。無論、信じられない言葉だったからである。

「兄さん、しかし」

「お前が想定している最悪の事態、俺だってそのくらいわかってい  
る。だが、だからといって命の大小を天秤にかけるのは好ましくない、と俺は思う」

言葉を発しようとしたヨシユアを制すように、続けるセイナ。再び発せられたセイナの言葉に対して、ヨシユアは反論をしなかつた。

「万が一、こちら側のことが露見し、我が国に矛先を向けるのであれば、」

セイナは壇上の上っていくと、ヨシユアの肩に手を置いた。

「俺が相手してやる」

「兄さん、そんな簡単なことではありませんよ」

「下衆とわかりきった相手なら、本気を出す」

銀色の瞳には、嘘偽りのない力強さ。

それを見たヨシユアは、兄から少し視線を外し、緊張を解いた。その表情には先刻までの冷淡さが消えていた。

「・・・アルフ、いま動けるのは何人位いますか？」

「私を含めれば四人ほどもです」

「お願いしてもよろしいですか」

「御意」

一連のやりとりをただ眺めていたライアに、再びセイナは近付いていく。

「アルフに言葉でも手紙でも、君の望む伝達手段で、先方へのメッセージを伝えてくれ、後は何とかしてくれる」

「・・・なぜ？」

「ん？」

「何故、そうまでしてくれるんだ？」

ライアは思う、自分は今の国にとっては厄介者でしかない。本来であれば、自国への引渡し、殺されていても文句は言えない立場の人間だ。

そんな者に、何故ここまでしてくれる。

ライアは、それを聞いた。

「さっきも言ったが、君のことを生かしたのは俺だ。それならば君のすることに俺は責任を持たなければならぬ」

「しかし、この件はあなた方に害あれども、なんら利益を生むことのないことだ」

「損得は良くわからんが、俺は聞いただろう？ 『何を伝えたい』って。そしてそれを聞いた。俺は君が友人に伝えようとしていることは必要なことなんだと判断した。それだけだ」

「それだけだと？あの執事が言った通り、最悪戦争になることだって」

「自らの命を賭してでも守りたいもの、譲れないものがあって、でも、守るための力がないから守れなくて、それって、辛いだろ」

ライアの言葉に、覆いかぶさるようにセイナの言葉が続く。

セイナの口調は、どこか先刻までよりセイナ自身の感情が籠っているように感じられた。

「俺は、自分が守ると決めた全ての人が笑顔で過ごすことの出来る日常を守りたい。ただ、それだけだ」

口調は柔らかであったが、瞳には強い意志が宿っている。語るセイナの拳が胸元で強く握られた。

「君が知っている通り、俺は魔狼と呼ばれた咎人だ。そんな人間の

言うことだ。信じてくれなくてもいい」

握り締めた手から力が抜け、セイナは少し冗談めいたように笑った。

ライアはセイナの語った言葉をかみ締める。

セイナの語る願いは、言葉にすることは容易であるが、即ち其れは、国王という立場から、守るべき民の願いを背負うことと同義。その重さを知ったうえで、セイナという人間は語る。

「・・・信じます、貴方の言葉」

ライアはセイナの瞳を見つめ、そう呟いた。

そして、少しの無言の後、ライアは決心したように、強い眼差しをセイナに向けた。

「貴方を一国の王と見込み、お願いがあります！」

ライアはセイナの前に跪き、頭を垂れる。

「私、ライア＝ローズフェルト、貴方の下で働かせて頂きたい！」  
「なにっ!？」

驚きの声は、壇上でセイナとライアの遣り取りを静かに眺めていたシオンであった。

ヨシユアも声を上げなかったが、その瞳は幾分か大きく見開かれた。

「この女は、クロ…グレイスさんの家で一時的に預かってもらうという話ではっ!」

思わず声を荒げるシオンを見て、セイナは少し考えるような仕草をする。

「・・・ふむ、そうだな」

セイナはヨシユアに目を向ける。

「どちらかといえば、そうですね。今回はシオンさんに賛同させていただきます。彼女は素性が素性ですから。ですが」

ヨシユアは少し考えるようにして言葉を放つ。

「監視という意味では、メリットはありますが」

ヨシユアはあくまで私情を挟まぬ判断を下す。但し決定権はセイナに委ねるような態度である。

セイナは向き直りライアを見る。ライアの瞳にはセイナのみが映っており、他の音は耳に届いていない。

「貴方から受けた恩、お返しするには私の身一つでは足りないかもしれないませんが、どうか」

「俺が俺の意思でやったことだ。恩など感じる必要はないのだぞ」  
「貴方にとってはそうであったとしても、私にとっては計り知れないほど大きなものです」

「俺の下で働くということとは、場合によっては・・・理解しているのか？」

「承知しております」

「君の地位を捨てることになるのだぞ」

「この身は逆賊の名に染め上げられています。いまさら地位など必

要ありません。しかし」

ライアは自らの胸に手を置く。

「私にも守りたいものがあります」

セイナはその言葉を受けて、真剣な表情でライアのことを見つめる。

「この状況は、俺が君をただ戦力や取引の道具、悪しきことに用いるために必要だから一時的に君の信頼を得るために一芝居を打ったのかもしれないぞ」

「貴方が嘘をついていたのなら、それは、信じた私の責任でもある。そのときは私が責任をとればそれで構わない。貴方の言葉を借りれば、そうなります」

一瞬の沈黙

「……ふふ、ふはははっ！！確かにその通りだな」

途端に、セイナは破顔すると同時に大きな声で笑い出した。

それを打ち破ったのはセイナだった。

それを見た、シオンは困った顔で溜息をつき、ヨシユアはやれやれといった表情で両手を挙げ、アルフは少し呆気にとられた表情をしていた。まさに三者三様の反応。

しかし、ライアは表情を変えずに、セイナを見つめていた。

「わかった。君の望むようにするが良い。ただし、先刻も言ったように特別扱いは、なしだぞ」

「ありがとうございます！！」

ここで初めて、ライアは微笑んだ。

その表情には皇女の高貴さではなく、願いが叶った少女のようなものを感じさせた。

「さて、君の所属だが、っと、どうしたシオン？」

そこに、様子を見ているだけの状況に耐えかね、シオンが壇上から下りてきて、セイナとライアの間割って入った。

「セイナ様、私、嫌です。こんなのと一緒に」

「願わくは、貴方の側付きにさせて頂きたいです。きっと、この小娘より役に立ちます」

シオンの言葉に覆いかぶさるような絶妙のタイミングで、意見を言ったライア。

しかし、その言葉の中には明らかな挑発が含まれていた。

一瞬でシオンの表情が、敵を見るそれに変わる。

「おい、何か言ったか。猪女」

「別に、狂犬に人間の言葉が理解できるとは思っていないから」

「お前、助けてもらった立場なんだから、その立場らしくな」

「あなたに助けてもらったではありません。この命はセイナ殿に助けて頂いたのです」

「…表に出る、イリアにおける上下関係ってのをレクチャーしてやる」

「望むところだ。あのときの決着を今つけてくれる」

近距離で火花を散らす両名。

いまここに、ライア＝ローズフェルト改めライアが、セイナの下に名を連ねた。

## 紅の進む道（後書き）

パソコンがクラッシュして、設定とか全てが飛んでしまっただけから、しばらく書く気力を失っていましたが、あまりにも中途半端すぎるのはイカンと最近思い始め、再度投稿を開始した次第です。

いやあ、まことにお恥ずかしい。

思い出しながら書いているので、かなり不定期になりそうですが、よろしく願います。

## 戦士たち？の休日

### 自由都市国家イリア

妖精派五国の一つとして数えられ、他の国が自国の血筋を重視し、他の民族と交わることを由としない風習を持つなか、元は多数の小さな民族が一つのコミュニティを築くことで成り立ってきた国であるという由来もあり、その来歴ゆえ他国からイリアへの受け入れ口は広く、現在においても多種多様な民族がこの国で暮らしている。

規模は、帝国はもとより他の妖精派の国と比べても、領土や人口の規模が小さいが、背に渓谷を背負い、国自体が高地にあるため、自然の要塞としての機能を高めている。

ただし、小国は所詮小国。防御の機能は高くとも、大戦時には、やはり攻める為の機能が重視され、また、国家間の立場においても優位に立つことが出来る。

それは大戦時のイリアに対して言えることであつた。加えて、当時の王は人格者として知られた先代の国王が病死した事により、なし崩しで即位した義理の弟。お世辞にも王たる器を持った者ではなく、強国に従い、依存することで何よりも自身の立場を守ろうとしていた人物であつた。

このような状況と立場、そして国を治めるべき者の器、普通であれば大戦時の混乱に紛れて、どこかの国に吸収されていてもおかしくなかつたこの国が、現在でも存続しているのは、ある一つの存在によるもの大きい。



国寶を迎えるなどする広間や共有スペースを含む会議室、食堂などがある中央塔とは別に、東塔と西塔に居住スペースを設けているイリアス城において、主にセイナやヨシユアなどの国内の要人とシオンやアルフ、マリンダなどの女性使用人が生活する東塔の通路を足音なく、しかし軽やかに歩く人影があった。

セイナ専属の侍従兼護衛、シオンである。

纏められた漆黒の長髪が、それでも少し嬉しそうな調子で弾み。軽い鼻歌を含んだ表情は微笑を表している。階段を登ろうともロングのメイド服は乱れることはなく、ただ一直線に目的地まで進む。

塔の最上階、その最奥に位置する扉の前で、シオンは歩みを止めた。

トントンと軽くノックをし、部屋の主の応答がないまま扉を静かに開ける。

このくらいの音では起きないことをシオンは知っているからだ。

「失礼いたします。セイナ様」

あくまでも優雅に、音もなく入室。その所作は隠密の実力者たちのそれに匹敵する。

まさに、入室というよりは潜入に近い、洗練された動きである。

机、ベッド、タンスといった必要最低限のもの以外は家具が見当たらず、またそれらは豪華なものではない。一国の王としてはかなり質素に見える部屋。しかし昔から、派手なものを嫌っていたセイナらしい部屋でもある。

子供たちからの手紙と贈り物であろう紙細工、そして大量の封筒と書きかけの手紙が机の上であり、シオンはそれを見て微笑んだ。きつと、子供たち一人一人に手紙を書くに違いない。セイナはそういう人だとシオンは思う。

やや、入り口から遠く、窓に近いところに配置されたベッドの上にセイナの姿を確認する。どうやら、いつも通り深い眠りにについているようだ。

シオンはそのままセイナのベッド横にある椅子に腰掛け、セイナのことをただ眺めるような状態になる。

セイナは自分に対する敵意、殺意といったものに非常に敏感で、それを感じた瞬間に眠りから覚醒してしまう。その感覚の鋭敏さはシオンにも、いまだ到達できないところにある。

しかし、それとは逆に、そういったものを感じさえしなければ、セイナの眠りは非常に深い。

自分と同じ色、でも少しだけ太いセイナの黒髪に手を伸ばし、引っ込める。

いままで、この楽しみの最中にセイナに触れたことはない。

起きてしまうだろうか？しかし、触れても起きることがなければ、今後はそれも可能に。

そんな駆け引きを一人楽しむ。

セイナの閉じられた左の瞳。そこには自分と同じものが

セイナの閉じられた右の瞳。そこにはかつて自分の光を奪っていたモノが

シオンは知っている。少し目が隠れるくらいに髪を伸ばしている

のは、シオンが自分の右瞳を気にしないようにするためだ。自分には気付かれないようにしているが、セイナのことなら気づかないことなどない。

セイナに聞いたたら、どう答えるだろうかとシオンは想像する。きっと、いつもの調子で、こっちのほうが格好良いと思うからなと言って笑って誤魔化すだろう。

「セイナ……様」

小さく、陶醉したような甘い声で囁く。

シオンが、このような声色で呼びかけるのは世界でもセイナにだけだ。

いつからだろう、彼にこのような思いを抱いたのは。

光を与えてくれたから？それは、体のいい言葉かもしれない。彼の力になりたい？それは近くにいたい口実だろう。

たぶん、闇の中にいるときに聞いた彼の鼓動と声に惹かれたのだろう。

誰よりも優しく、強く。それを主張せず、だからこそ理解されず。不器用に笑う。そんな彼を見て、思いを強くしたのだろう。

そして、あの風景に彼の心を見て、私は

「セイナ様」

もう一度囁く、その声は限りなく、優しい。

いつも通り、もうしばらくはこの状態でいようとシオンは思う。

ドン！ドン！ドン！

「っ！？」

突然、部屋の扉が叩かれる。

無論何より驚いたのは、セイナではなくシオンであるが。

「セイナ殿、よろしいか！おや、鍵が開いている。無用心だな、我が主は」

扉の向こうから、独り言にしてはやや大きい声が聞こえてくる。

その声を聞いたシオンの表情は、先程の優しさが微塵も含まれておらず、憎悪に満ちていた。

「おはようございます。セイナ殿、良い朝です、よ……何をしているのだ？チビ」

「お前こそ、何をしに来た？デカ女」

長身でメイド服を纏った女性。

赤い髪を揺らしながら入室してきたのは、ライアである。

ライアもシオンの姿を見つけ表情が険しくなった。

傍目でわかる、まさに犬猿の仲である。

「私はセイナ殿が、今日は公務の休みだと聞いて、街のことを教えて頂こうと思ひ参上したのだ」

「公務が休みの日、セイナ様は昼頃まで起きない。だからお前は帰れ」

「昼だと？かなり時間があるではないか」

「そうだ、そもそもセイナ様に聞かなくとも、街に詳しい者は城に

溢れている。他の者でも良いだろう。帰れ」

「いや、そのなんだ、私としてはセイナ殿を望むのだが」

「駄目だ。帰れ」

「って！そもそも何でお前の許可が必要なんだ！」

ライアの叫びに、シオンは焦ってセイナを確認、いまだ熟睡。  
大丈夫だ。

「・・・静かにしろ。セイナ様が起きたらどうするのだ」

「つと、そうだな。これではセイナ殿に迷惑がかかる」

「それに、セイナ様の休日は常に予定があるのだ」

「そうか、それはどのような予定だ」

「それはだな」

シオンは少し下向きになり、恥ずかしげな表情をつくる。

両の人差し指を突き合わせ、どこか言い辛そうに、しかし、嬉しそう。

それを見たライアはとてつもなく嫌な予感がした。

「私と、お出掛けだ」

そして、ライアに向けて不敵な笑み。

精神的優位を内包した表情は、見るものによってはどこか邪悪だった。

それを見た瞬間に、ライアの感情が弾けた。

「調子に乗るなよっ！狂犬があー！！」

「新人は黙って便所掃除でもしてろっ！猪女があー！！」

「・・・んん、なんだ・・・ってお前ら何してるんだっ！？」

自分に向けられていなくとも感じるほどの強烈な闘気のぶつかり合いにより、セイナは休日朝を迎えた。

^^ ^^

中央塔にある食堂は、朝食時から活気に溢れていた。

食堂には多くの四人掛けの円卓、そこには城内の様々な職種の間が自由に座っており、入り口近くの厨房とカウンターが直接繋がっている受取口には料理を待つ者たちが一列に並んでいる。

「いつ見ても不思議な光景だな」

円卓の一つを囲む集団に混じり食事をとっているライアが感慨深げに呟く。

それを聞いた、隣に座る眼鏡をかけたメイド服の女性が可笑しげに微笑む。

「そうよねえ、わかるわよ、その気持ち。いろんな子を見てきたけど、特に他国出身の子は中々慣れないのよ。でも大丈夫、じきにこれが自然になるわよ」

「うむ、そういうものか」

「うむ、そういうことだよ。新人くん」

言いながら、ライアの肩をポンポンと叩く。

少女の名はミナハハセ、ライアのルームメイトであり、年齢は22歳であり、城内メイド中ではキャリアが長い人物である。ブロンドの癖のある髪が特徴的で、普段は眼鏡をかけ緩めのやわらかい

性格をしているが、眼鏡を外し、ヘッドドレスをつけた途端に性格が反転し、騎士団の鬼教官のような変貌を遂げる。

前任のメイド長であるミリンダからも次期メイド長に推薦されていたが、自分には向かないと丁重に断り、現在は主に新人メイドの教育担当を任されている。厳しいながらも、誰も見捨てることはない、懐の深さから多大な信頼を得ており、当然、ライアの素性は知らない。

「まあ、でも不思議な光景よね」

ミナが示す方向に、同じように円卓。

しかし、そこで食事をとっているのは、この国の王であるセイナと、執事であり国王の補佐役でもあるヨシユアである。

セイナは眠そうな表情をしながら、しかし2人分ほどの料理が皿に盛り付けてあり、それを一定のペースで口に運び咀嚼している。対して、ヨシユアは書類を片手、空いたほうの手にサンドイッチを持ち、視線を交互に動かしながら食事を摂取していた。

「王様が私たちと同じ場所で普通に食事してるのなんて、たぶんウチの国だけでしょうね」

「最初からああだったのか、ミナ殿」

「いいえ。昔は…そうね、国王専用の食堂に大きな食卓があつて、そこで食事をとられていたらしいのだけだね。セイナ様が王になつてすぐに、『食事はみんなで食べるものだろう』って、前の食堂を潰して今の形に変えちゃったのよ。でも実際、こっちの方がなんかいいわよね。私もセイナ様と同じ意見。それにそれ以外の需要もね、ほら」

悪戯っぽい笑みを浮かべながら、ミナが周囲を見渡すような素振りを見せ、ライアがそれに従うと、セイナとヨシユアのテーブルの

周りに座っている女性達が熱烈な視線を両者に向けている。というか、その席の周りだけ女性の密度が異常に高かった。

「眼福っていうのかしらね」

「眼福？どういふことだ」

「あら、ライアちゃんにはちょっと早すぎたかしらね。それならお姉さんが教えてあげましょう」

含みがある怪しげな笑みでライアを見るミナ、対するライアはキョトンとした表情をしたが、すぐにミナが言うことを聞くために構える。

「一方は、人望厚く、皆に慕われ、強く、そして優しい、顔のつくりは超一級品の野性味溢れる我らが主セイナ様。もう一方は、常に冷静沈着、常に主に付き従い、女性のような外見としなやかなボディを併せ持つ、見目麗しき智将ヨシユア様。この組み合わせが導き出す答えは」

「・・・良い主と部下ではないのか」

「ふふっ、子供ね。少し耳を貸しなさい」

言われるがままライアはミナに近付く、そしてミナがライアの耳元で何事か囁くと、途端にライアが赤面した。

「ふ、ふ、ふ、不潔だっ!?!」

「ほら、大声出さないの。夢見ることは少女の特権なのよ」

「それが、少女のする想像かっ!?!」

ライアは顔を紅潮させ、慌てるようにミナから身を離す。

その表情を見たミナは満足そうに、にやけた表情をしていた。

「ミー。からかうのは、そのくらいにしておけ」

その二人の間に割ってはいるように、声が聞こえた。

ライアとミナが、声のする方へ同時に顔を向けると、呆れた表情をしたアルフ。ステイングラが立っていた。

「そこ、空いているなら座らせてもらおうぞ」

ライアとミナに対面するようなかたちで、空席にアルフが座る。

アルフとミナは、城内でも数少ない同年代同士であり、その平常時の性格こそ逆ではあるが、互いを信頼しあう親友である。

「久しぶりだなミー、それとライア。それにしても、相変わらず悪ふざけが過ぎるぞミー。もう少し年長者としてだな」

「何よ、アル。私は淑女として必要な心得を後輩たちに受け継いでほしいだけなのよ」

「淑女、か。私としてはライアの意見に賛成だが」

「それって、私之不潔ってこと？」

「公然の趣味は構わない…が、君個人の内面がね」

「あら、辛口ね」

可笑しそうにカラカラと笑うミナとは対照的に、アルフはサラダを口に運び始め静かに咀嚼している。

「アルフ殿、先日は」

「ん？…ああ、あの程度のこと気にすることはない」

ライアはアルフに何かを言いかけたが、少し思い出すようにしたアルフに言葉を被せられてしまった。無論、悪意ではなくアルフの

気遣いであることをライアは察した。

先日、ライアの元に一通の手紙が届いた。

手紙の主はエリシア。かつて、故郷であるローズフェルトで家族同然に育った幼なじみであり、ライアの信頼のおける部下、何より大切な親友でもある。

ライアの指名手配を機に、ローズフェルトに対して自らの命を賭して反旗を翻そうとしていたエリシアに対し、自分は生きており、自分のことよりもエリシア自身の命を大切にして欲しいと綴った手紙への返事であった。

エリシアの手紙には、必ず再会できることを願っているだけ書かれていたが、古い付き合いであるライアには、それが何よりもエリシアらしく、彼女が命をなげうつようなことをしないという絶対の信頼を感じることが出来た。

手紙を渡した後にはライアは、無粋との理由でライアが礼を言う前に早々にライアの部屋から退室してしまっていたが、ヨシユアの言っていた通り、この手紙の遣り取りは、とてつもないリスクを背負って行われたものである。そのため、ちゃんと正面から御礼を言いたかった。しかし、その日からなかなかアルフが捕まらず、今日が久しぶりの再会であった。

アルフはその件の礼であることを察して、手紙の件はふせるよう暗にライアに促したのだろう。ライアの素性を加味しての判断である。

「ねえ、何が？どうしたの？」

その遣り取りを見たミナが、興味を持ってライアとアルフに聞く

「今回の任務で向かった場所にライアの探している書物がないか、時間があれば調べて欲しいと言われていてね。それについてさ」

「それは見つかったの？」

「いや、しかし結果は上々だ」

「…そうなの？」

「それより、食事中は食べることに集中しろ、ミー」

話はこちらで途切れるかと思ったライアの目に、また怪しげな笑みを浮かべるミナの姿が映った。

「ところで、アルはどうなのよ？」

「どつって、何が？」

表情を変えないアルフを意に介さないよう楽しそうな調子で話しかけるミナ。

「ヨシユア様のことよ。進展、あるの？」

「ガハッ！？ゴフッ！ゴホッ！」

「大丈夫か、アルフ殿！？」

ミナの言葉に、アルフは盛大に咳き込み顔を紅潮させた。

案じるライアの言葉に、アルフは大丈夫だと手で合図する。

「ミーには関係ないことだっ！」

「あら、強気。ということとは進展なしと」

その様子を見て、ライアがミナに話しかけた。

「どついうことだ、ミナ殿？」

「ああ、ウチの女性陣には周知のことなのだけど、アルフってば、ヨシユア様に惚れててね」

「そうなのか」

「そうなのですよ。だけど、我らが頼れる隠密副隊長ともあるう方が、何故か想い人と二人きりになると、何も出来なくなっちゃってね。私も心の姉として心配なのだけど」

アルフに視線をやり、少し哀れみを含んだ瞳で嘆息するミナ。

対してアルフは持っていたフォークを握力で曲げるほどに掴み、震えている。

「誰が誰の姉だっ!？」

「同年代とはいえ、一つ年上なのよね。私」

「何だと、馬鹿にしているのかっ!・・・ふっ、いいだろう、皆にはまだ話すつもりはなかったが、特別にお前たちに聞かせてやろう」

すると、アルフは自らの胸に手をやり、目を瞑り、自信を含んだ笑みを浮かべた。

「この前、あれは夜も更け、皆が完全に寝静まった時間だ。私はヨシユア様の部屋に呼ばれ、赴いた。そして、私はあの方に導かれるままに・・・」

アルフは一度言葉を溜めて、息を吐くように語った。

「一緒にお茶を飲んだのだ」

「・・・お子ちゃまが」

そんなことだろうと思ったと、小さくミナは呟き、対するアルフ

は自信ありげな表情でミナとライアを見据えた。

ライアがはじめて、広間でアルフと対峙したとき、常に冷静さを失わない凜としたイメージがあっただが、城で働き始めてそれほど日数はたっていないにもかかわらず、そのイメージはライアの中で日に日に崩壊している。無論、一連のことで感謝はしているのだが・・。

「まあ、でも、アルにしては良くやったほうね」

「何だ、その上からの物言いは、不愉快だぞ」

「あら、褒めたのよ？これでも」

ミナの言葉に、アルフが眉をひそめると同時に食堂がざわざわと始める。

ミナとアルフの話に耳を傾けていたライアも含め、三人がその方向に目をやると、セイナとヨシユアが、何やらやりとりをしていた。

「アル」

「任せる」

ミナとアルフが短く言葉を交わすと、アルフは神経を集中させ、魔力を体の一点に集中させていく。

アルフの得意としている魔術の一つで肉体強化の派生、神経強化である。

視覚・聴覚・触覚・味覚・嗅覚の五感を可能な限り強化させることが出来、隠密という任務の為以外にも、その用途は多方面に渡る。もちろん今回のような場合でもだ。

「アル聞こえる？」

「ふっ、私にかかれればこのくらい。よし、聞こえた言葉をそのまま

言っぞ」

神経を集中させた状態で、アルフが言葉を発する。  
ライアとミナはその言葉を聞きながら、セイナとヨシユアの動きを観察した。

『ですから、私は兄さんの身を案じてですね』

『前々から言っているが、自分のことは自分で責任を持つ。お前が俺の心配をする必要はない』

心配した表情を浮かべるヨシユアに対して、少しうんざりした表情のセイナ。

『しかし、兄さん』

『しかしじゃない、だいたいお前はいつも腹にたまらなそうなものばかり食べて、逆に心配だぞ。これやるから、ちゃんと栄養とれ』

『いま僕の食生活は関係ないじゃないですか』

『まあ、そう言っつな。弟から心配されるのは嫌だが、兄が弟を心配するのは不自然じゃないだろ？』

言っつて、ヨシユアの頭にセイナが手をのせる。

『兄さん…ありがとう』

優しい笑みを浮かべるヨシユア。その表情とやりとりを見た周りのメイドたちが息を漏らし、どこか恍惚な表情を浮かべていた。

「くっ!?!」

「アルフ殿っ!?!」

アルフが突然胸を押さえ、苦しそうな声を上げた。心配そうに声を掛けるライア。しかし、近くにいたミナは特に気にしてない様子である。

「いかんっ…やられた」

アルフは眉間に皺を寄せ、尚苦しそうに、その息は荒い。

「よろしければ、医務室に」

「…ふう、案ずるな、体調は問題ない、否、極めて良好だ…そうだライア、任務で赴いた地で非常に美味な果物が手に入った。後で、皆に配るので楽しみにしてしてくれ。それと、記録術式の使える…、そうだ、あそこの席に座っている茶色い髪を片方で縛っているメイドに、いまの情景を書き出して貰ってくれ、いや、私も常に主のことを従者として意識することの出来るようにだな、別にミナのような下世話なモノではないぞ」

「…う、うむ、承知した」

「そうか！礼は弾むぞ、ライア。私は君のような人間がこの城で働いていることを誇りに思う！そうだ、少し走りこみをしてこよう。それではミー、ライア、また後で！」

矢継ぎ早に言った後、ライアが首肯したことを確認するとアルフは感謝の言葉を述べ、食べ終わった食器を持ち、どこか満足げな表情で颯爽と去っていった。

「嘘つきは良く喋るのよね」

「う、うむ」

取り残された二人のうち、ミナは溜息をつきながら、ライアは複雑な表情でアルフを見送った。

「…そういえば、チビ、ではなくシオンさんはどこなのだ？」

何となく形容しがたい空気に耐えかねライアは思いついたことを口に出した。特に今までの会話に対して脈絡のない話題ではあったが実際に少し気になっていた。

あの性格ならセイナの近くに常にいそうなのだが、と。

「えっ？ああ、シオンちゃん。今日のこの時間なら練武場ではないかしら」

「練武場？」

「あら、ライアちゃんは行ったことない？おかしいわね、護衛付役の使用人はシオンちゃんが案内するはずなんだけど」

「そこで何を」

「たぶん隠密の人たちの訓練に参加しているはずよ。気になるのライアちゃん？」

返ってきた言葉に、ライアは不敵な笑みを浮かべた。

「練武場、か」

## 戦士たち？の休日（後書き）

すっごい久しぶりの更新、半年以上更新していないという表示が出てびりまくりさ！

書いてなかった原因は色々ありますが主に怪我的な（全治十ヶ月ってホントに体験すると痛いです）

今は元気です。○ンパ○マンには敵いませんが、まあ元気10倍ってとこで

これから、もそもそ頑張りますですハイ

## 戦士たち？の休日 2

イリアス城には二つの訓練場が存在している。

一つは、屋外に設営された広い敷地面積を誇るもので、主に集団での訓練から軽い運動まで幅広い用途に使われている。『共同訓練場』。

もう一つが、中央塔の地下に伸びる階段を下った場所に設けられ、敷地面積は共同訓練場に及ばないものの、特殊な仕掛けや、多くの武具が用意されており、限定された条件下を想定した訓練や、少数の実戦的な訓練のために使われている『錬武場』。

目的により使い分けが行われているが、国外での危険な任務や特殊な任務が多い隠密隊は主に錬武場を使用している。

そしていま、錬武場において、動く三つの影とその場から動かぬ一つの影があった。

いずれも徒手空拳、静寂した錬武場内において打撃音のみが響いている。

三つの影はいずれも細身ではあるものの引き締まった肉体の男であり隠密隊の動きやすく密着性の高い黒い制服を着用している。

三人は一つの影に向かって緩急をつけた攻撃を繰り返し、一人が下からなら、もう一人は上、もう一人は背後からと絶妙なコンビネーションを見せている。

だが、本当に驚嘆すべきは攻撃を受けている方である。

男達から受ける休みなない攻撃を受け止め、いなし、かわす。その動きを腕と体捌きの上半身のみで行っていた。常人離れた動きだが、本人は余裕すら感じさせる涼しい表情でいる。

動かない影の主はシオン。服装はいつもの制服ではなく、隠密の制服に似た形状の白を基調とした服を身に纏い、髪は邪魔にならないよう後ろで束たばねている。

よく見れば、特に表情を変えず淡々とした動きのシオンに対して、男達は肩で息をし、汗が頬を伝って滴り落ちていく。

「…そろそろ行きますね」

静寂した場内に突然感情の籠かごつていないシオンの声が響いた。瞬間男たちの表情が変わり、互いに視線を合わせ、シオンに向けて一斉に特攻する。それぞれがもてる渾身の一撃…しかし、仲間同士の一瞬の目配せが決定的な隙を生んだ。

今までその場から離れることのなかったシオンが、動いた。

打撃が到達するより先に、疾走するシオンの影は、正面から打ち込んできた男の下に潜り込み、突き上げるような掌底を顎に喰らわせる。その一撃に意識を刈り取られた男は脱力したままシオンの方へグラリと崩れ落ち、シオンはその体の陰に隠れるようなかたくなかった。

男たちも素人ではない、倒れる男が視覚の役割を果たしている今が好機とみて、すかさず隙を付いて残りの二人が攻撃を加えるが

「っつ！！！！」

そこにはシオンの姿はない。

「上です」

声と同時に、一方の男の意識が暗転する。自らが意識を失うという感覚がないほどの速さの出来事であった。

シオンの行動のほうの方が男たちよりも単純に速かった、ということである。跳躍からの踵落かかとおとしが脳天に炸裂し、男は反撃の間もなく倒れこみ昏倒させられた。

打撃の反動を利用し、シオンは空中で体を一回転させ静かに着地する。

最後の男が一直線にシオンに向かってくる。防御を考えぬ捨て身の攻撃だ。だが、この場では最良の選択でもある。

全力の拳打。しかし、振るわれた腕は虚しく空を切る。シオンは体の上下位置を少しずらしただけであったが、その速度が異常であった。相手には消えたという錯覚を与えるだろう。

そのまま男の腕を正面から肩で担ぐような格好になると、シオンは体を反転させ、全身を使い、男を地面に叩きつけるようにして、投げた。

「ぐあっ！」

シオンは地面に叩きつけた男を確認。まだ、意識があるようだ。シオンが最後の男に一撃を入れようと攻撃のモーシオンをつくったとき

「そこまでっ！！」

と突如、野太い男の音が響き、シオンは動きを止めた。

「お見事にございますシオン様」

「…ウオルフさん。いえ、たいしたことではありません」

「ご謙遜なさらないでください。それでは我々の立場がありません」

声が聞こえた方向にウオルフが姿を現した。見渡すと、シオンや男たちを囲むように隠密隊の隊員が存在している。いずれも気配を消して先刻の攻防を見ていたのである。ウオルフ曰く、これもまたひとつの訓練だとか。

ウオルフがパチンと指を鳴らすと、同時に何かが弾けるような音が響き、シオンは隠されている瞳に感じていたわずかな圧迫感がなくなったのを感じた。

「どうです、コレはお気に召しましたか？」

「集中するには良いものですね」

「お褒めにあずかり光栄でございます」

ウオルフの指した『コレ』とは、結界魔術のことであり、先刻の組み手の際、シオンと隠密隊の男三人を半球状に包み込んでいた。

但し、人の手によるものではなく道具を用いたもので、シオンは地面に埋め込まれた手の平大のプレートを見た。

マジックエンチャント

魔法具

人は生まれながら体内に何らかの魔力を持っているが、内包している量は個人差があり、その量の比率は大よりも小のほうが圧倒的

に多い、したがって皆がみな、実際に魔法を行使できるといっわけではない。そのため、日常生活から戦闘用まで様々な用途のために、魔術行使の補助や単体の魔術を込めた道具が開発されている。

今回の物も、ウォルフが先日の任務時に武器商人から仕入れたもので、プレートを中心に一定時間結界を作り出すものである。効果は他者の立ち入りの制限と結界内外の気配の遮断、即ち簡易の密室を作り出す装置である。

先日の孤児院の件により、セイナの命を受けウォルフが入手してきたものであり、コレを元に、より防御に適した魔法具に改良するのが目的である。

倒れていた男達に他の隊員が近付き、喝を入れ、意識を復活させる。

「お前らっ！整列だっ！！」

「「「は、はいっ！！」「」」

先程まで倒れていた3人の隊員がウォルフの声に反応し一列に、直立不動の姿勢でシオンの前に並んだ。

「「「ご指導、ありがとうございましたっ！！」「」」

そして、シオンに向けて一斉に感謝の意を述べる。対してシオンは少し困った表情をしていた。

「ウォルフさん、こういうのは止してください」

「何故ですか、シオン様」

「第一、指導ではありません。私は自分の鍛錬のために勝手にここ

に来て、結果としていつも協力して頂いている。礼を言うなら本来は私のほうです」

「しかし、こちらとしてはそれが貴重な訓練となっております。見ているほうにしても勉強になることばかりでございます。シオン様の身は一つなれど、我々隠密隊の多くがその恩恵にあずかっております故、お許しただけければ、ここにいる者全員で声高々にお礼を叫ばせていただきたいと思います」

「…私が言うだけ無駄なようです」

シオンは諦めの意を表情で表し、対するウオルフは嬉しそうに破顔した。

「シオン様、よろしいですか？」

「何ですか、リテロさん」

リテロと呼ばれた先刻シオンに一番初めに昏倒させられた男が、遠慮気味に話しかけてきた。他の二人もシオンの方に視線を向けている。

「我々の動きについて気付いた点がありましたらお聞かせいただきたいのですが」

「そのようなことを言う立場ではありませんよ」

「そこをなんとかお願いいたします」

「…みなさんも、ですか？」

「…「よろしくお願いします！」」「」」

横一列に並んだ男三人が一斉に声を上げる。

「私からもお願いいたします」

「ウオルフさんまで、はあ…わかりました」

軽く溜息の後、シオンが話し始めようとしたとき

「三人の攻防一体型から転じて玉碎覚悟で攻撃のみになったのは悪くないが、一瞬であれ、目配せは良くなかった。相手の瞬発力と判断力を考えたなら、あそこで目を離すのは危険、たとえ相手に読まれる可能性があっても動きに織り交ぜた呼吸か足音のタイミングで合わせた方がよっぽど良かった。そうだろう狂犬？」

被さるようにした声、錬武場に行く地上の階段から姿を現したのはライアだった。その言葉から、シオンと隊員の組み手の様子を見ていたようである。ライアと初めて対面する隊員もあり、錬武場が少し困惑した空気に包まれる。

「あの方は、」

「私は、セイナ殿の護衛付役の使用人、ライアだ。よろしく頼む」

初対面の隊員がシオンやウォルフにライアのことを聞こうとしたが、それより先に本人から名乗り出る。しかし、シオンの表情は冷たい。場の空気も冷たくなったように感じられた。

「『自称』護衛付役の間違いだろ、猪女ししめんな」

「私はセイナ殿から正式に拝命されている」

「あの強引さを拝命というのならな」

完全に階段を降り切ったライアとシオンが対面すると、正面から火花を散らし合い、錬武場にいる隊員がざわめき始める。

『シオン』という存在が、このイリアスにおいてどのような存在であるか、理解しているからこそそのざわめきであった。

シオンはそのまま、ウォルフの方に向き直ると

「ウォルフさん、その魔法具への追加事項として『特定の人物が近付く又は進入した場合、目標を駆逐する』という機能を増やしてください」

と不機嫌さを露にした。

「ふむ、そのような複雑な効果を付けるのは、いささか難しいですね。ところでライア殿はいかがなされたのかな？」

「いや、錬武場がどのようなものか、一度拝見したかったため立ち寄らせてもらった。本来なら、どこかの小さな先輩が案内してくれることになっていたようだが」

二人の状態に困ったような表情で対応するウォルフ。

特に『小さな』を強調し、答えたライアはすぐにシオンと向き合  
う、表情もどこか挑発的であった。

対するシオンはその視線を真正面から受け止めるようにしていた。

「…皆さん。悪いのですが、私と彼女を二人きりにさせていただけませんか？」

錬武場にいるライア以外の人間に対するシオンの願い、それはしかし、強制と威圧なによりも怒りが感じられた。その証拠に、若い隊員は膝が震えている。

「念のためにお聞かせいただきたいのですが、何をなさるおつもりですか？」

またも、困ったような表情でシオンに問い掛けるウォルフ。実際のところ、この場でシオンに話しかけることが出来るのだけでも、

さすが隠密隊長であるといえる。

シオンはウォルフを見ずに答えた。

「今から、教育が行き届いていない新人を指導します」

## 戦士たち？の休日 2（後書き）

前回からの続きです。例のごとく誤字脱字が後から見つかった場合は急いで修正します。

それにしても、この二人（シオン＆ライア）は仲が悪いなあと感じている読者様が多いとは思いますが、さてこれからどうなってしまうのか？頑張って続きを書こうと思います。

追伸：最近人恋しさからmixiを始めてみましたが友達をどう増やせばいいのかわかりません（泣）誰か友達になってくれえ…せめて使い方を教えてください

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2579m/>

---

Fenrir ~ 魔狼と姫君 ~

2011年9月15日15時31分発行